

40-803

文學博士
法學博士
男
加藤弘之著

自然の矛盾と進化

東京
金港堂書籍株式會社

明治
30 14 28
丙午

„Nach ewigen ehernen
Grossen Gesetzen
Müssen wir Alle
Unseres Daseins
Reise vollenden.“

Goethe.

吾吾は一に萬古不易の
金剛大法に支配されて
吾吾の生存境界を成就
することに餘儀なくさ
れて居る。ギエーテ

序

余は三年前即ち明治三十六年に拙著道徳法律進化の理の第三版を刊行したが其書中に有機體には唯一なる利己的根本動向が存し又有機界には三大矛盾なるものがあつて彼の利己的根本動向と此三大矛盾とのために有機界に必ず生存競争といふものが起る而して生存競争が起れば又必ず自然淘汰といふ作用が起つて、それで進化が出来るといふ意味を粗論しておいたけれども其論は唯ざつとしたとてあつたから更に其理を詳論せんがため今回本書を著すこととなつたのである。

本書も右の舊著同様に全く利己主義と進化主義とに

依據して居るのであつて此兩主義はいつも余の議論を産み出すものである然るに世人は余の主義を誤解して從來普通の利己主義と同一視して居るのみならず往往日常俗話に用ふる利己の意味と同様に解して居て種種の悪口を言ふ人さへもある加藤の説は全く利己で倫理に反して居る忠孝仁義を蔑視した主義である忠君愛國の道を紊亂する説である杯と罵る人が随分ある。

けれども左様な人人は全く余の説を誤解して居る左様な人人は全く余の著書を讀んだとがなくして唯利己主義と云ふ名目から推察して説を立てるのである歟若くは多少それを讀んだにしても精讀せぬところから遂に誤解して説を立てるのであるから決して取るに足ら

ぬ批評である余の説が倫理に反し忠孝仁義忠君愛國に反らぬのみならず却て是等を奨励するに足るものであるとは精讀を惜まぬ人には十分わからねばならぬとである。

のみならず余が見る所を以てすれば古來凡ての宗教凡ての徳教又は凡ての倫理説が一として利己主義から出て居らぬものはないのである。して見れば凡ての宗教徳教倫理説は悉皆利己主義であると認めてよいと思ふところが獨り世人のみならず宗教家徳教者倫理學者哲學者それ自身さへも其教其説が實は全く利己主義から出て居るといふを意識せずに居るから利己主義と云へば全く倫理に反するもののやうに考へるのである是

これは實に千古の大迷見であると思ふ余は舊著や本書に於て此千古の大迷見を打破した考であるが精讀を厭はぬ人には其理が十分了解し得られるであらう。

又余が進化主義を社會上就中倫理上に應用した點に就ても随分駁撃を受けるのであるが併し是れも全く余の所説を熟讀せぬからのものである、どうか熟讀した上で十分の駁撃をされるやうに乞ひたいと思ふ。

本書は單に「自然界の矛盾と進化」と題しておいたけれども、それは唯簡單にするためのみであつて實は「自然界(有機界)に於ける三大矛盾と進化就中道德法律の進化」⁽¹⁾とせぬければならぬのである、それゆへ本書は全般有機界の進化の大意をも概論す

るけれども其畢竟の目的は就中道德法律の進化を説くことに歸するのである又本書の體裁を講話體にしたのは唯成るべく了解し易くせんがためのみのものである。

(1) *Drei grosse Widersprüche in der Natur (Organismenwelt) und die Entwicklung, insbesondere die der Moral und des Rechts.*

余は現時の碩學エルンスト、ヘッケル氏 (Ernst Haeckel) に學ぶ所が最も多いヘッケル氏は今日自然科学(物的科學)と心的科學及び哲學との間に橋渡しをして居るのであるが心的科學や哲學は自然科学から豊富なる食料を得ぬれば到底眞に活動するとは出来ぬのであるからヘッケル氏は此事に最も心力を費して居る他にも多少其様な人もあるけれども同氏の力が最も大なるやうに思は

れる同氏は自己の新研究を稱して一元的哲學機械的哲學又は生物學的哲學と言つて居るのである。(1)

(1) Die monistische, mechanistische oder biologische Philosophie.

丘淺次郎博士は其著「進化と人性」にヘッケル氏が専ら經驗的に研究するのは甚だよろしいけれども、經驗區域から、いつとなしに經驗以上の區域に逸出して大膽に論ずる所は宛かもパノラマが實物と繪畫とを巧みに繋ぎ合せて見せるやうな感じがあると述べて居るが余も多少博士と同じやうな感じを持って居るヘッケル氏は最も經驗實證を重んずる學者でありながら自己は動もすると經驗實證以上に逸出するやうな危険なをして居る歟のやうに思はれぬではない是れは蓋し自己の新哲學

を餘り早く組立てんと思ふ所からの過失ではなからう乎と思はれる。

けれども同氏の如く一心不亂に自然科学を哲理上に應用せんとして居る學者は今日では尙少なからうと思ふ將來の哲學は、つまり同氏のやつて居るやうな方法でなければ組立てるには出来なからうと余は確信するのである、けれども余は決して同氏を盲信するものではない同氏の説にも服し難いと思ふ點は往往あるが、それは本文の所論でわかるであらう。

余が本書の稿を起したのは去去年即ち明治三十七年の夏頃であつて既に二年餘にもなるが其間去年と今年と二回胃の大患に罹て前回には殆ど危篤にも及ばんと

した程のとて其間七八箇月も休業して今度漸く成業したのであるけれども余の淺學無識で本書の如き學理を論ずるのは到底適せぬとであるのみならず余は今年既に滿七十歳の高齡に達し殊に大患後にとでもあれば氣力も氣根も殆ど衰へて最早此上研究を積むには耐えぬと思ふから先づ今日までに得ただけの貧しい知識を生前の置土産として披露するに過ぎぬ若しも讀者諸君が賛否に拘はらず幸に批評されるともあらば精讀の上余は大に益を得るであらうと歡ぶとである。

明治三十九年十月一日 東京にて

文學博士法學博士男爵加藤弘之 述ぶ

目次

緒論

第一章	目的宇宙觀と因果的宇宙觀并に超自然法と自然法	二
第二章	二元主義と一元主義	二二
第三章	意志の自由と意思の必然	三八
第四章	造化と進化	六〇
第五章	有機體の根本動向に關する二元主義と其一元主義	六七
第六章	結論	一一四
第一講	自然界(有機界)に於ける三大矛盾	
第一章	時時刻刻生誕する有機體の員數と其生	二

目次

存需要物の員數とに於ける矛盾……………一三〇

第二章 動物の生存と其食餌とに於ける矛盾……………一三一

第三章 有機體の根本動向と其身心力とに於ける矛盾……………一三五

第二講 有機界に於ける生存競争自然淘汰

第一章 三大矛盾と生存競争……………一三九

第二章 無意識的及び意識的生存競争并に生理的及び心理的生存競争……………一五三

第三章 生存競争より起る自然淘汰及び身心の遺傳と其應化并にラマーク氏の進化説……………一五六

第四章 ダーキン氏の進化説及び人為淘汰……………一五九

第三講 人類界に於ける生存競争自然淘汰

第一章 吾吾人間と高等動物との懸隔……………一七六

第二章 人類界に於ける生存競争及び其種類……………一八二

第四講 國家内に於ける生存競争自然淘汰

第一章 個人間及び團體間の生存競争……………一八五

第二章 治者と被治者との間に於ける權力競争……………一九一

第三章 貴族と平民との間に於ける權力競争……………二〇七

第四章 自由民と不自由民との間に於ける權力競争……………二一六

第五章 男子と女子との間に於ける權力競争……………二三六

第六章 父(母)子の關係并に吾が邦君民間及び其他の諸階級間に於ける權力競争の異例……………二五〇

各國家相互間に於ける生存競争自然淘汰

然淘汰

第一章 優劣國民の相互間に於ける生存競争……………二六一

第二章 開明各國の相互間に於ける生存競争……………二七一

第六講 國家の内外に拘はらず個人又は團體の相互間に於ける生存競争自然淘汰

第一章 個人又は團體の相互間に土地、物件、權力、農工商諸業、學術技藝、宗教等に關して起る生存競争……………二八一

第七章 生存競争と人類界に於ける進化(開化)

第一章 進化即ち開化は重もに生存競争に起因すると共に戦争が開化を促すと……………二九一

第二章 宗教、學術技藝、農工商業等の生存競争が開化を促すと共に學問の眞價……………三〇八

第三章 諸階級間の權力競争が開化を促すと共に權力と權利との相違……………三二七

第八章 諸階級間の權力競争と道德法律の進化

第一章 倫理主義の二大派即ち先天説、後天説并に乙派中の二小派人造説、功利説……………三四七

第二章 人造的倫理……………三五二

第三章 功利的倫理……………三五九

第四章 自然人爲の二淘汰に基ける功利主義……………三七五

第五章 諸階級間の權力競争に依て道德法律の進化すると……………三八六

第六章 各國家の生存競争に依て道德法律國際道德、國際法律の進化すると……………四二五

第九講 人爲淘汰に因由せる道德の進化

目次……………五

第一章 宗教倫理教に依て道德の進化すると……………四四五

第二章 自力淘汰に依て道德の進化すると……………四五五

附録 將來道德法律の進化に關する想像……………四六五

第一章 自然科学(物的科學)が道德法律に及ぼす
影響并に道德法律の區域の變化……………四六五

第二章 後世宇内の全合同即ち宇内統一の創建
に依て道德法律の進化すると……………五二一

緒論

諸君！余は本論に入る前に余が執る所の主義如何を明かにせんがため先づ左の諸項に就て概畧を述べておく必要があると思ふ。

第一 目的宇宙觀と因果的宇宙觀(Die teleologische oder vitalis-

tische/ind kausale oder mechanistische Weltanschauungen)并に超自

然法と自然法(Uebennatur- und Naturgesetz)。

第二 二元主義と一元主義(Dualismus und Monismus)。

第三 意思の自由と意思の必然(Willensfreiheit und Willensnotherwendigkeit)。

第四 造化と進化(Schöpfung und Entwicklung)。

第五 有機體の根本動向 (Der organische Grundtrieb) に関する一元主義と一元主義。

是れから右の順序に大意を述べるであらう。

第一章 目的宇宙觀と因果的宇宙觀並に超自然法と自然法

目的宇宙觀と云ふのは宇宙に起る現象には本來目的と云ふものが確定してあつて其目的通りに現象が起るのであると云ふやうに認める觀察の方法である然るに因果的宇宙觀と云ふのは凡て宇宙に起る現象には本來目的と云ふやうなものは決してない唯原因と結果との必然的連鎖で現象が起るのである一の原因があればそれに相應した必然なる結果が起て来る、それから又其結果が更に原因となつて更にそれに相應した必然なる結果が生

ずるのであると云ふやうに認める觀察の仕方である。

それゆゑへに此觀察の兩方法は全く表裏反對して居るのであるが双方ともに古代からあるのであるけれども古來多くの哲學者は目的宇宙觀を取て居る殊に宗教に至ては殆ど全く目的宇宙觀を取て居るのである併し近世に至ては自然科学 (Naturwissenschaft) の非常に進歩したので目的宇宙觀の謬見たると因果的宇宙觀の眞理たるとが明かになつたために目的宇宙觀を棄てて因果的宇宙觀を取る學者が比較的増したとてである而してそれは二つの原因に出るのであるが其事に就て一寸述べるであらう。

「古代にモーセス氏 (Moses) の宇宙創造説と云ふものがあるが、それに據ると宇宙に先だつて先づ唯一神と云ふものがあつて此唯一神が最先に無機體なる地球を造り次に水陸を分ち次に有機體を造り最後に吾吾人間を造て之を地球の主としたと説て居るの

であるが唯一神は全く吾吾人間の爲めに地球も造り萬物も造つたとするのであるから地球萬物は全く目的的に造られてあると云ふ主義で最も顯著なる目的宇宙觀である而して基督教も此造化説を取るものであるから其結果として地球中心説(Die geozentrische Weltanschauung)と人類中心説(Die anthropozentrische Weltanschauung)と云ふ主義が起つた地球中心説と云ふのは宇宙のあらゆる天體中で最も主體となるものは吾が地球であつて其他の天體は悉く吾が地球に從屬して居ると云ふ説であり又人類中心説と云ふのは地球上萬物の中で最も尊貴なるものは吾吾人間であつて他の森羅萬象は皆吾吾人間の用に充てんが爲めに創造されたのであると云ふ説であるから此二つの説は目的宇宙觀を最も十分に表明して居るのである而して此二つの説は近世に至る迄哲學上にあつても随分大なる聖權(Autorität)を持つて居たものである否今日

も尙多少持つて居るのである。

併し此聖權が憐れにも近世に至て痛く撃破されぬければならぬ時運となつたのであるが偕如何なる力が此聖權を撃破した乎と云ふに蓋し宇宙系統説(Die Theorie des Weltsystem)と及び進化主義(Die Entwicklungslehre)と云ふ二大力である西曆第十六世紀の初にコッペルニクス氏(Koperniks)が宇宙の系統を發見し次で第十七世紀にニュートン氏(Newton)が重力を發見し又第十八世紀にラブラース氏(Laplace)及びヘルシヘル氏(Herschel)が宇宙系統説を完成して吾が地球は宇宙に數限りもない太陽の中の一つの太陽に屬して居る一小遊星であつて無邊無極なる宇宙から見れば微塵程のものでもないと云ふとが明かになつたからそこで地球中心説は忽ち撃破されたそれから又第十九世紀にラマールク氏(Lamarck)とダーウソン氏(Darwin)とが進化の理を發見して吾吾人間は最初より人間

ではなかつた下等動物から進化に依て始めて人間となつたのであると云ふとが明かになつたから、そこで又人類中心説が忽ち大撃破を蒙つたのである。

併し目的宇宙觀は決して歐洲の哲學や宗教のみに存するのではない又他の國國でも同様である支那でも印度でも矢張目的宇宙觀であつて因果的宇宙觀と云ふものはないのである尤も支那でも印度でも唯一神なる造物主といふものを立てず又天地に目的があると云ふやうなとは言つて居らぬけれども併し古來哲學や宗教で説く所に依て觀察して見ると矢張目的宇宙觀に歸するのであつて決して因果的宇宙觀にはならぬのである但し佛教では因果應報と云ふとを説くから因果的宇宙觀であると云ふ説が出る歟もしれぬけれども然るに其因果應報といふのは善惡の應報と云ふが如き因果論であつて前述の因果論の如く物理

的に屬するものでなく全く倫理的に屬するものであるから臆斷に外ならぬのであるのみならず箇様な因果論は却て明かに目的宇宙觀たることを表明して居るのである何故ならば吾吾が善行をなせば善果を得べく惡行をなせば惡果を得べしとするのは全く勸懲の意味に外ならぬとて其目的を示して居るとが誠に明かであるからである。

但し以上論じた地球中心説と人類中心説との二つのみが目的宇宙觀であると云ふ譯では決してない其他宇宙に存在する凡ての物と力 (Kraft und Stoff) とに各一定の目的が具つて居ると云ふ主義を目的宇宙觀と云ふのである例へば吾吾人間の手は物を握るために造られてあり足は歩行するために造られてあり目を見るため耳は聞くため鼻は嗅ぐため口は言語と飲食とのために造られてあると云ふやうに何でも角でも凡て先づ目的が定めら

れてあつて其目的に合ふやうに造られてあると云ふことになるのである然るに近來進化學の開けに依て左様な考の間違て居るとが明かになつて來た進化學の研究に依て見ると吾吾の手足や耳目鼻口と云ふものの如きは吾吾の遠祖たる最下等動物にはないのであるが其後の進化に依て次第に手足や耳目鼻口が出來てそれぞれ分業が起るやうになつたのであるといふとが明かになつた而して箇様なとは重にも比較解剖學(Die Vergleichende Anatomie)の進歩に依てわかるやうになつたのである、して見れば目的的宇宙觀とは丸で反對で目的といふものは決して本來定められてあるものでなくして進化のために漸漸に出來て來たものであると認めぬければならぬのであるが、それが即ち因果的宇宙觀といふものである全く原因と結果との必然的連鎖で出來るものに外ならぬと云ふ主義である。

天體殊に吾が地球の成立に就て觀察して見ても直にわかる凡そ天體の成立する初めといふものは皆氣體的火球であるが然るに其火が漸次消滅して冷却すると後には固體となる併し固體となつても其初めは尙熱氣が盛であるから唯固體的熱球と云ふやうなものであるが其後更に漸次冷却して來ると其固體上に存する無機體から最下等の有機體が始めて生ずるやうになる、それから其有機體相互の生存競争で進化が起て漸次高等有機體が出來て來るのである吾が地球の今日の如きが即ち、それである。

諸右の如き天體の成立に就て何が造化上天體に與へられた目的である乎と云ふとを研究して見るに一向わからぬ天體は氣體的火球であるのが其目的であるとも云はれまい又固體的熱球が其目的であるとも云はれまい然らば冷却に依て有機體殊に吾吾人間の如き最高等有機體が生じて來た所の今日のやうな狀況が

其目的の達せられたのであるとも確言は出来まいと思ふ併し左様申せば或は非難者があつて吾吾人間が將來益進化して文明の最頂點に達し知徳圓滿の域に到て至大なる福祉を受くるやうになるのが始めて地球の目的の完全に達せられる時であらう、それゆへ從來の経過は此完全なる目的に達する迄の手段であらう、杯と言ふ歟も知らぬけれども併し此地球は後には熱も全く消滅して吾吾人間のみならず凡ての有機體も滅亡し更に最後には地球それ自身も滅亡して仕舞ふのである、して見れば造化上地球に與へられた目的が何である乎と云ふとは決して容易に判断は出来ぬのである唯地球の目的は進化の段階に依て時時變化するものであると認むるより外に考へ方はないのである又一つ他の例を擧げて見れば吾吾人間の手の如きも初めより手ではない吾吾の近祖たる高等動物の頃には矢張足であつた即ち四足獸であつた

のであるけれども、それが進化して人間となり直立歩行するとなつて、それで前足が手といふものになつた、それから手と足とが分業して各其職業を異にするやうになつたから爲めに吾吾の進歩開明が非常に早くなつたとである、して見れば前足は前後其職掌を異にした譯であるから即ち其目的が變化して來たと認めぬければならぬ唯是れだけの道理から考へても造化上一定不變の目的があつて其目的通りに造られたものでない、と云ふとは甚だ明かなとである。

右様の道理から研究して見れば目的的宇宙觀と云ふものは決して取るに足らぬものである唯進化の段階に依て目的が種種に變化するものであると云ふとを知らぬければならぬ而して其進化と云ふものは全く因果的に出来るものである吾吾人間が下等動物から進化して遂に今日の人間になつたと云ふのも全く原因

結果の必然的連鎖で出来たとであるが又地球が最初氣體的火球から固體的熱球となり又其熱が冷却して有機體が発生し最後に吾吾人間が出来たと云ふのも更に將來熱氣が全く消滅して凡ての有機體が滅亡し最後に地球それ自身さへも全く滅亡するに至ると云ふのも是れ皆原因結果の必然的連鎖で出来るのであると云ふとを知らぬければならぬ。

以上述べた丈けても目的的宇宙觀の謬説たると因果的宇宙觀の眞理たるとは既に明かであらうと思ふけれども尙こゝに一の例證を擧げて更に其理を明かにしやうと考へる例へば動物の體軀の内部又は外部に往往不用の器官がある牡獸又は男子の乳房の如きは明かに外部に顯はれて居る不用器官であるが又内部にあるものでは人間の尾である是れは外面からでは少しも見えぬけれども皮を剥ぎ肉を除て骨髄だけにして見ると尻の處に

小さい骨が四つばかり珠數つなぎになつて居て解剖學上では之を尾胛骨と唱へるさうである即ち尾の根になる處である又或る解剖學者が人間の胎兒より成人に至る迄の間に生ずる不用器官を調べて見たのに其數が殆ど百に近かつたと云ふとである又他の一例を擧げて見れば暗い洞窟内の水のある處に住て居る魚類には目の形が存して居るにも拘はず其目は物を見る力を持って居らぬと云ふとである即ち全く不用器官を具へて居るのである。箇様な不用器官は何のために存して居るのであらう乎造化に目的と云ふものがあるならば箇様な有形無用の器官の存すべき筈はなからうではない乎一向理解の出来ぬとである然るに之を因果主義から研究して見ると困難なく理解が出来る牡獸と男子の乳房の如きは今日こそ全く不用器官に相違ないけれども併し今日の獸となり又人間とならぬ遠き祖先の時代には其乳房が有

用であつたであらう即ち遠き祖先の時代には獨り女性のみならず男性も亦其兒を乳養したとがあつたであらう歟と推察するとが出来るのである或時南米の未開地に旅行した者が俄に妻の死去したので初生兒の乳養に困難して已むなく一時己れが乳房を含ませた所が初生兒が何も知らず頻に吸いついて居る内に少しく乳汁が出て來たと云ふとをフムホルト氏(Humboldt)が其旅人から直接に聞いたとのである。

併し凡ての器官は不用になつて來ると自然漸漸と縮少して遂には纔に其形を存するのみとなる。それゆへ男性の乳房も今日では全く形ばかりのものになつたと思はれる尙多くの時代を経たならば其形迄も遂には消滅するやうになるであらうのとである人間の尾も同様の譯であつて人間の近祖たる猿猴には明かに尾があるけれども其中で最近祖とも思はれる所謂似人猿

Menschenaffen)たる亞細亞に住するオラング及びギツボン(Orang und Gibbon)亞弗利加に住するゴリラ及びシムパンゼ(Gorilla und Schimpanse)と唱へる最高等の猿猴には既に尾はなくなつたのである。それゆへ是等は無尾猿と稱するのであるが併し此無尾猿にも又人間にも尾胛骨だけは、まだ残つて居るけれども是れとても遠き將來には恐らく消滅してしまふのであらう又暗い洞窟内の水のある處に住む魚類に今日目の形のみ残つて居ると云ふのも蓋し最初打ち開いた水中に住て居た魚類が何等かの原因で洞窟内に住むやうになつたところが洞窟内の暗處では目の働きは不必要であるゆへ次第に唯形のみ存して其働はなさぬやうになつたのであるに相違ないと云ふとである進化學上には箇様な例證は随分ある決して珍らしいとではない。

右様に解釋すれば少しも困難はないして見れば決して造化に

目的のあるのではなくして全く原因結果の必然的連鎖で進化に依て時時目的が變じて來るのに外ならぬと云ふとは少しも疑のないとである古代は進化の理がまだ開けなかつたために萬物が皆それぞれ特別に造られたものと信じて居た、人間は最初より人間として造られ牛馬は最初より牛馬として造られ犬猫は最初より犬猫として造られ又各種の鳥類各種の蟲類及び各種の植物は最初より各種の鳥類各種の蟲類各種の植物として造られたものであると信じて居たのであるから遂に右様な目的主義に陥つたのも無理のないとである箇様な考といふものは特にモーセス氏の造化説に固有であるのみならず古代凡ての宗教又は凡ての哲學に固有して居るのである。

併し因果法に支配されるのは決して特に體軀のみでない心神も亦同様全く因果法に支配されるもので決して目的法に支配されるものでない凡そ物と力とは必ず常に相合して瞬時も離れて存在するとの出來ぬものである、それゆへ凡そ物として力のあらざるものなく又力として物に添はざるものないとは既にギエーテ氏 (Götte) の述べた通りであるが有機體の心神なるものは即ち力である發展した力であるからそれゆへ全く因果的支配を受けるのである形而上學者 (Metaphysiker) は兎角物即ち體軀と力即ち心神とを全く二物の如く考へ心神は主にして體軀は従であると思ひ獨り心神のみが眞我である杯と思て居るのであるけれども甚だ謬見である、全く體軀と心神とが相合して一の我をなすので眞我だの假我だの主だの従だのと云ふ差別は決してない二物の如くして其實全く一物である所の體軀心神は必ず因果的支配の下にあつて毫も目的的支配の下にあるものでない然るに形而上學者は前述の如き見解よりして動もすれば體軀は因果的支配を

受けるけれども心神は目的支配を受けるとのやうに信じて居るのである。

尤も目的主義の外に因果主義の起つたのは決して進化主義の開けたためのみではない因果主義も多少既に古代よりあると言つてよろしいフリッツ、シュルツェ氏(Fritz Schultze)は希臘の哲學者エムペドクレス氏(Empedocles)を因果主義の始祖であると説て居るのであるがヘッケル氏(Haeckel)も此説を賛成して居るエムペドクレス氏は如何なると言つて居る乎と云ふに凡そ動植物の形體は最初目的に造られたのではないけれども自然力相互の抗争のために變化を受けて遂に目的になつたと述べて居るのである(1)其後の哲學者中にも因果主義者は多少あるけれども其重なるものは先づスピノーザ氏(Spinosa)であらうが併し近來進化學の開けて後でなければ眞に因果主義がわかつたとは言へないのであるから其前の因果主義は決して十分なものではないのである。

(1) Fritz Schultze 著 Philosophie der Naturwissenschaft, 1. Buch, Ueber das Verhältniss der griechischen Naturphilosophie zur modernen Naturwissenschaft 并に Ernst Haeckel 著 Natürliche Schöpfungsgeschichte 第二五八頁

以上述べた所の因果的法則は又一に自然法(Naturgesetz)と云ふものであり目的的法則は又一に超自然法(Uebernaturgesetz)と稱するものである自然法は唯絶對的因果の法則を以て働くものである全く原因と結果との必然的連鎖に依て此宇宙を支配するものである然るに超自然法と云へば此自然法の區域を超絶して居ると云ふ意味になるもので何等か宇宙以上に宇宙を支配する至大の勢力があつて自由自在に宇宙を支配すると云ふことになるのである基督教の唯一神と云ふが如きものは其最も著しいものであるが

又支那で天と云ひ又は上帝と云ふが如きものも其類である併し、それのみでない哲學者の所謂實在又は絶対杯も多くは其様なものになるのである。

基督教の唯一神は全く人格を具へたものであるが天又は上帝杯と云ふと少しく曖昧なものになる然るに實在と歟絶対と歟言ふと全く人格杯のあるべきものとは思はれぬけれども併し此宇宙以上にあつて宇宙を支配する大勢力が自然法の區域を超絶して宇宙を支配するとすれば必ず一の大自由なる意思を以て居らねばならぬ道理になる宇宙を支配する大勢力に一の大自由なる意思がありとするのは何の據り處あつて言ふのである乎實にわからぬとである抑意思なるものは獨り有機體就中動物が具有して居るものでは亦全く因果的自然法に依て生ずるものであるから之を自由なるものと考へるのさへ謬見であるのに更に此意思

を宇宙の大勢力に迄及ぼして宇宙の大勢力には自然法の區域に屬せぬ大自由の意思なるものがある杯と考へるのは最もわからぬとであると思ふ。

以上述べ來つた通りであるから宇宙を支配する大勢力と云ふものは徹頭徹尾因果法即ち自然法の外には一もない併し是れは宇宙以上の大勢力ではない宇宙其者の勢力である目的法即ち超自然法杯云ふものは前世紀以來の自然科学就中進化主義の進歩に出逢つては到底一日も存立するとの出来る筈のものでない。

第二章 二元主義と一元主義

二元主義と云ふのは種種に解釋が出来るが凡て宇宙は二色のものが本源となつて成立して居ると云ふ主義であり又一元主義と云ふのは、それに反して宇宙は決して二色のものが本源となつ

て成立したものでない宇宙の本源といふものは全く單一なものであると云ふ主義である、太古未開の人間が神に善惡仁不仁の二種があつて善神は宇宙を組立てるが惡神は善神の邪魔をして宇宙を破壊すると考へた宇宙觀 (Amphibieismus) 抔も即ち二元主義と言つてよろしい吾が邦の神代に直日神と禍日神とあり又和魂と荒魂とあり古代ペルシア國のゾロアステル (Zoroaster) 教に光明の善神と暗黒の惡神 (Ormuzd und Ahriman) とあり印度の古代に保護神と破壊神 (Wischnu und Schiwa) とあり埃及の古代に善神と惡神 (Osiris und Typhon) とあり又最古のヘブリーユ國に天上の嚴父神と地上の慈母神 (Aschera und Elion) とあるが如き加之基督教でさへ唯一神と魔鬼 (Ein Gott und Teufel) とを説くが如きは皆未開人民の二元的宇宙觀と言つてよろしい。

又古代にあつては勿論今日にあつてさへも體軀と心神とを以て二個別種のものと認めて或は魂は天に歸し魄は地に歸する抔唱へ或は死後身體は消滅するも靈魂は永く消滅せぬ抔と云ふとを信ずるのは是亦二元主義である又古代の學者は勿論今日の碩學鴻儒でさへ往々殆ど右同様の信仰を保て凡そ無機體は特に因果的自然法に依て支配されるけれども有機體は又目的超自然法に依ても支配されると言ひ若くは有機體の體軀は自然法で支配されるけれども其心神は又超自然法でも支配される抔信じ若くは獨り吾吾人間の心神のみは全く超自然法で支配される抔説く學者があるのであるが是等は皆二元主義者と云ふ者である今日の學者にして神變不可思議とも云ふべき超自然法を云云するに至つては實に驚くべきことである。

然るに一元主義は之に反して宇宙は全く一元より出でて居る換言すれば凡そ宇宙の現象は全く一元の發展であつて特に確乎

不動なる一定の因果的自然法に依て支配される獨り無機體のみならず有機體の體軀も心神も此唯一の自然法に依て支配される吾吾人間の身心と雖全く同様である決して除外例ではない因果的自然法は毫末も除外例を許すものでないと云ふ主義である是れが即ち一元主義の大意であるギョーテ氏の詩に「吾吾は一に萬古不易の金剛大法に支配されて吾吾の生存境界を成就するとに餘儀なくされて居る」(1)と云ふとがあるが此金剛大法と云ふのが即ち因果的自然法のとであるギョーテ氏は實に此一定不動の金剛大法に一の除外例のないとを知て居た一元主義者である。

(1) "Nach ewigen, ehernen

Grossen Gesetzen

Müssen wir Alle

Unseres Daseins

Kreise vollenden."

ヘッケル氏は其著 *Weltanschauung* (1901 第七版第二六八頁) に一元主義と二元主義との全く正反對なる所以を容易に了解させるために其比較の表を擧げて居るが之を見ると其正反對なる所以が一目瞭然であるから、ここに一寸それを譯して見やう。

二元主義

- 一 宇宙は二個の境界より成立す一は自然界即ち物界二は超自然界即ち心界なり

一元主義

- 一 宇宙は唯一なる境界より成立す即ち唯一なる本體界是れなり而して物と力とは全く相合して離れず

二 故に學問は二部に分る

一は物學即ち因果を究む

二 故に學問は唯一なる物

學のみ所謂心學は物學中

る經驗學二は心學即ち因果に依らざる超經驗學なり

三 物的現象の認識は經驗實證に依り心的現象の認識は特に超自然的方法即ち啓示に依る

四 本體法(物の保存と力の保存との二部に分る)は特に自然界即ち物界の用に適す物界にありては物と力とは全く相合して離れず然れども超自然界即ち

の一部に屬す而して百般の科學は一に經驗に依る

三 物的現象心的現象の認識共に皆特に經驗即ち吾の感官と腦との作用に依る

四 本體法 (1) は物と心との別なく皆之を制馭す極めて高尚優越なる心的動作と雖神經細胞の能力に出でざるものあらず而して其理は畢竟物的作用に於

けると異なる所なし

心界にありては心的動作は毫も物理的化學的法則に拘制せられずして全く自由なり

(1) 本體法と譯したのは *Substanzgesetz* と稱するものでヘッケル氏は之を自然法中の本源大法と言つて居るのである丁度國法中で諸法律と憲法との異同のあるやうなものである。

「近世の碩學中で二元主義を取つた重もなる人はライブニッツ氏(Leibnitz)とカント氏(Kant)とである然るにカント氏の如きは無機界上には最も強き一元主義を取りながら有機界上には二元主義を取つたのであるが甚だ奇怪なことである」
ヘッケル氏やシュルツェー氏の言ふ所に據ればカント氏はギエーテ氏ラマーク氏等と同様に進化主義發見者の一人に算へられる人で殊に彼の天體瓦斯說(Die Kosmologische Gaslehre)即ち天體が最初氣球體より進化した

りと云ふ説なり)は全く彼れの發見に係る程のとなれども惜い哉彼れの一元説即ち因果主義は單に無機界上に止まつて有機界にあつては全く二元主義となつて因果と目的とを併せ取つたのである」と述べて居る又ヘッケル氏は「カント氏も青年の頃にあつては全く一元主義者であつたけれども當時は自然科学の進歩が尙十分でない上に彼れは天文物理化學鑛學杯の諸學は多少修めたにも拘はず動物學や解剖學や生理學の如きは殆ど修めなかつたゆへ彼れに先入師となつて居る基督教的二元説のために惑はされて遂に二元主義を取るやうになつたのである」と論じて居る又同氏はカント氏を評して「彼れは右では因果説を主張し左では目的説を主張して居るとも述べて居るが面白い言ひ方である (1) 彼れが倫理上絶對的理性命令(Kategorische Imperativ)の如き謬説を唱道したるは全くそれゆへである。

(1) Hückel 著 *Verhältnisse* 第四五五頁 同氏著 *Natürliche Schöpfungsgeschichte* 第九頁 同氏著 *Lebenswunder* 1904 第四二二頁

「カント氏は碩學とは云へ尙自然科学の十分進歩せぬ時代であつたから右の如く二元主義に陥つたのも無理もないとであるが然るに今日の碩學にして尙多少二元主義に陥つて居る者のあるのは更に驚くべきである其人人の中で重なる者を擧ぐればフィッヒョー氏(Virchow)デュブアンレーモン氏(Du Bois-Reymond)ウンント氏(Wundt)であるがフィッヒョー氏は有名なる病理學者人類學者であつて彼の細胞病理(Cellularpathologie)の發見をした人でありデュブアンレーモン氏は有名なる生理學者であり又ウンント氏は有名なる生理學者心理學者哲學者である是等の人人も壯年の頃には皆一元主義者で特に因果法即ち自然法を取る人であつたのであるけれども晩年に至て心神上のとに就ては又目的法即ち超自然法を

取るとなつて遂に二元論者となり了つたのである。

ヘッケル氏の言ふ所に據れば「マイルヒョー氏は壯年の頃にはビュフネル氏フォグト氏 (Bichner und Vogt) と同様に全く一元論者であつて人間の身心の全く一元なる所以を極論して大に二元主義を駁撃したにも拘はず老年に及ぶに至て全く其主義を變じて人間の心神は其體軀と同く自然法に依て支配されるものではなくして超自然法に依て支配されるものである」と云ふことを主張するととなつた即ち二元論者に變じたのである又デュブアン・モン氏も同く壯年の頃には全く一元主義を確信固執する人であつたが後年に至て人間の意識は毫も生理的作用に關係のなき純心理的のものであると云ふことを主張するやうになつた是亦全く二元主義に變じたのである」(其著 *Weltrhythmus* 第一零九頁第二零七頁)

又ウント氏に就てもヘッケル氏は箇様に述べて居る「彼れが三十一歳の時に人間と動物との心神に就て論じた著書には全く一元的に論じてあるが其後三十年を経て六十一歳に至て同書の第二版を出した時には全く二元主義に變じた初版の時には彼れの心理學は自然科学と云ふべきものであつたが第二版に至ては全く心性科學に變じて仕舞つたのである而して彼れは其變化の理由を序文に述べて『余が初版に於て人間の心神を單に自然科学的に論究したのは今日より考て見れば甚だ謬て居る全く余の青年未熟の罪過とせぬければならぬ、それゆへ第二版に於ては之を改めて純心理的即ち超自然的に論究したのである』と言つた此碩學にして此言ありとは實に驚くべき退歩とせざるを得ぬ然るに此第二版の序論は學校哲學者(嘲罵語なり)から非常の稱賛を受けたとてあるが四十年來唯一の因果主義を固執して動ぜざる余(ヘッ

ケル氏なり)はウント氏の青年未熟の罪過を首肯するとは出来な
い却て此罪過を宇宙の自然を知れる眞理とせぬければならぬ云
云 (Waltersel 第一一六頁至極尤な論であると思ふ。

右様な譯で自然科学に於て最も有名なる今日の三碩學さへも
老年に及びては壯年時代の一元主義を棄て二元主義に陥るので
あるから況て其他の學者が動もすれば二元主義に陥つて頻に超
自然だの純心理だの神秘だのと述べ立てるのは無理もないとて
あるニウトン氏(Newton)さへも老年になつて死ぬ前には頻にバイ
ブルの話をして居たと云ふとであるが歐洲では基督教の影響が
非常に強いので碩學鴻儒と云はれる程の人でも祖先傳來の遺傳
と自己の幼年からの修養で種種の迷信が先入師となつて居て容
易に消滅しないものと見える、それゆへ壯年で氣力の盛な時には
一時此迷信の束縛を脱するとが出来ても老年で氣力が衰へると

忽ち跡戻りして更に元の迷信に陥るやうになると思はれる。

右様の譯ゆへ歐洲の學者に右の如き弊のあるのは已むを得な
いとしても古來全く基督教的修養を受けたとのない日本人の子
孫が妄に超自然主義だの神秘主義だのに迷はされるやうなとは
なからうと思ふのに矢張同様な主義に傾くものが多い、それゆへ
若し箇様な主義に傾かず特に自然主義因果主義を悦ぶ人を見
ると、やれ唯物論者だの物質學者だのと罵る風習がある、して見る
と今日の人間は假令基督教に入らぬでも兎角超自然主義だの神
秘主義だのと云ふ不條理な主義から容易に脱するとの出来ぬ程
に低い程度の者であるの歎も知れぬと思ふ。

果して然るならば此の如き迷信を十分に打破するには、どうし
ても自然科学の益進歩發展するやうに骨折るより外に仕方がな
い哲學の如きも今日自然科学の影響を受けて漸く一新せんとす

る時運となつて來たのである近頃ヘッケル氏の著した *Weltrithsel* 及び *Lebenswunder* と題する兩書の如きはヘッケル氏が機械哲學一元哲學若くは生物學的哲學 (*Mechanistische, monistische und biologische Philosophie*) と稱するものであつて將來は漸く右様な新哲學が出来るであらうと思ふ尤もヘッケル氏の哲學が完全なるものであるとは余も決して信ぜぬけれども併し將來の新哲學は必ず自然科學的基礎から出てゆくであらうと思ふして見れば今日にあつては、どうしても自然科學の進歩發展が第一の急務たるに相違ない。自然法に就て因みに一言したいとがある學者が往往箇様なとを言ふ吾吾人間が若しも自然法に背くとがあらば忽ち其罰を受ける例へば飲食は生命の保全に必要な自然法である勉強は知識を得るに必要な自然法である故に若し飲食せぬときは必ず餓死せぬければならぬ又若し勉強せぬときは必ず無識に終らぬ

ければならぬのは當然のとであるが是れが即ち自然法の必然的處罰である杯と云ふのであるけれども是れは甚だ間違て居る何故と云ふに自然法は吾吾人間のために出て居るものでは決してないから吾吾に生命を保たせやう吾吾に知識を得させやうと云ふやうな目的のあるものではない國法は人民の幸福を保護する目的を有して居るものであるけれども自然法は決して人間の幸福を保護する目的を有して居るものでない、それゆへ飲食して生命を保全し得るのも又飲食せずして餓死するのも二つながら自然法である勉強して知識を得るのも勉強せずして知識を得るとの出来ぬのも是亦二つながら自然法である。

生命を保全し得べき自然法に支配されるのと、その出来ぬ自然法に支配されるのとの相違のみである知識を得べき自然法に支配されるのと、その出来ぬ自然法に支配されるのとの相

違のみである而して此反對の方面に働く二種の自然法に支配されるのは各已むを得ぬ原因に出るのである、それゆへ吾吾が國法に支配されるのは違て自然法に支配される上に於ては毫も之に背くとは出来ぬのである、一刹那と雖自然法の支配を脱するとは出来ぬ國法には背くとは出来ぬ、それゆへ背けば罰を受ける、けれども自然法には毫末も背くとは出来ぬ、それゆへ罰を受ける、と云ふともない唯自然法の此方面で支配される乎若くは彼方面で支配される乎の相違のみである、此方面で支配されるのと彼方面で支配されるのとの相違で吾吾に利害の相違はあるけれども併し其害が罰と云ふとはない、左様な道理であるから吾吾が若し自然法に背くとはあらば忽ち其罰を受ける、杯と學者の言ふのは大に間違つたとである。

終りに臨んで支那の一元二元の主義に就て一寸述べやうと思ふ。

支那には太極説といふものがあり又理氣説といふものがある、是れが取り方に依ては一元主義とも取れる又二元主義とも見られるが併し甚だ漠然たるものである、此一元二元のとに就ては近頃井上哲次郎博士が其著「日本朱子學派之哲學」に論述して居るのであるが其説に朱子は太極の一元を立てるやうであるけれども又理氣を説て太極は單に理なりと言ふから畢竟二元となるが王陽明や羅整菴はそれに反して理氣合一主義を唱へて居るから是れは一元論である、又日本の儒學者中にも一元二元の二主義に分れて居ると論じた併し此所謂理なるものが甚だ漠然たるものである、學者の説き方に依て或は宇宙の條理又は法則といふやうな意義にも聞えるが又物に對する力といふやうなものにも取れる、氣と云ふ方は先づ物を指すやうであるけれども是亦甚だ漠然として捕捉すべからざるやうなものになるのみならず歐洲の直覺學者

と同様に宇宙の原理を凡て道義的に説くのであるから根本から
謬て居る又自然法だの超自然法だの因果法だの目的法だのとい
ふ差別は知て居らぬのであるから右等のとに就ての説は少しも
ないが併し超自然法や目的法を十分に信じて居たとは間違ない
と思はれる。

第三章 意思の自由と意思の必然

吾吾人間は他の動物とは違て萬物の靈長とも云ふべき程のも
のであるから他の動物が自由の意思を持たぬに反して人間は自
由の意思を持って居る人間は自分自ら自由に思考する事が出来る
自由に歩行しやうと考へる自由に寝やうと考へる自由に善行を
しやうと思ふ又自由に悪事を働かうと考へる然るに他の動物は
左様でない彼等が何事をしやうと思ふのもそれは皆自分で自由

に考へるのではない餘儀なく左様に考へぬければならぬ原因が
彼等の精神の中に存して居るのである食ひたいと思ふのも寝た
いと考へるのも自分から考へると云ふ譯でない自然左様に考へ
るやうに彼等の精神が束縛されて居るのである然るに獨り人間
の精神だけは左様な束縛を受けて居らぬ是れが人間の他動物と
大に異なつて居る點であると説くのが即ち意思自由説と云ふも
のである。

然るに又一方に反對説が起る即ち人間と雖他動物と同様に自
分で自由に思考する力は持つて居らぬ自由に思考すると信じて居
るとしてもそれは決して自由に思考するのではない矢張精神内に
餘儀なく左様に考へぬければならぬやうな原因が存して居るの
である矢張精神が束縛されて居るのである少しも他動物と異な
つた所はないと説くのが是れが即ち意思必然の説と云ふのであ

る。
そこで意思自由説は即ち目的主義に合し必然説は因果主義に合するのであるから自由説が謬見て必然説が眞理であると云ふとは論ずる迄もない。吾吾が自由に肥へるとも瘦せるとも出来ぬのが生理上明白であると同様に吾吾が自由に何事も考へるとの出来ぬのも自由は何事も欲求するとの出来ぬのも心理上明白なとである。心理と生理とは全然別物と云ふ譯のものでない。心理は畢竟生理の半部である。心理が生理の半部である以上は一は自由にして一は必然であると云ふやうな相違のあるべき道理がない。凡そ吾吾人間が凡ての有機體無機體同様に微塵程の自由をも持て居らぬと云ふとは最も明白なとて一點の疑はない。無機體と有機體との間は勿論有機體中でも吾吾人間と他動物との間には進化の程度の大なる違ひから現象上にも大なる程度の違ひがある。

ところより遂に獨り吾吾人間には他動物に決して無き所の自由の意思があると云ふやうに誤認するとなつたのである。

從來は自由意思論者 (Indeterminist) が多い。カント氏の如きは其最も重なる人であるが、同氏は此自由意思といふとを吾吾人間の靈魂の不滅と及び唯一神に對する信仰 (Die Unsterblichkeit der Seele und der Glauben an einen Gott) と共に吾吾が最も大切に考へぬければならぬ三大事項であると説いたとである。同氏は前述の如く自然科学に就ては全く因果主義を取たのであるけれども人間の心性杯の事になると正反對に目的主義に陥つたのであるから其筈であると思ふ。又前述のチュプアレーモン氏の如きも全く自由説であつて彼れが宇宙の大疑問として説いた七謎 (Sieben Welträthsel) の七番目に意思の自由と云ふものが擧げてある。

然るに甚だ不思議と云ふべきは古代の基督教者なるアウグス

テイン氏とカルフイン氏(Augustin und Calvin)がヘッケル氏や又は純唯物論者たるホルバツフ氏(Holbach)等と全く同様に意思必然論者(Determinist)であつて自由説を否認したと云ふとであるが是れは實に奇妙に思はれるのであるけれども此宗教者と此唯物論者とが共に均く自由説を否認した理由は其實全く反對して居るのである其理由は全く反對して居るのであるけれども其結果は全く同一に歸した實に奇妙なとである其譯如何と云ふに右二人の宗教者が自由説を否認して必然説を取つた理由を尋ねて見るに吾吾人間は全く一神から創造された者である、それゆへ全く一神の意思に遵て思考もし行動もするのであつて毫も意思の自由と云ふものはない全く一神の意思の儘に生存して居るのみである若しも意思の自由を認許するならば遂に一神の全能力を否認するのであるとの説である基督教者にしては實に尤な説である

思ふ他の基督教者が一神の全能力を確信しながら更に吾吾の自由の意思を認許すると云ふは實に矛盾の甚だしいものである其他ライブニッツ氏(Leibniz)も右同様の理由で必然説を取つたのであるが然るに前世紀の一元論者が必然説を主張したのは右と異なつて全く一元主義に依つたのであつてラブラース氏の如きは其重なる者である(Welthüsel第一五〇頁第一五一頁)

西曆第十八世紀迄に於て意思自由主義を攻撃するのは大抵哲學又は宇宙形成學(Kosmologie)の側からであつたなれども第十九世紀になつてからは重みに比較生理學(Vergleichende Physiologie)と進化學(Entwickelungslehre)の側から必然主義を主張して自由主義を攻撃するとなつた即ち第十八世紀前と第十九世紀後とは必然説の防護と自由説の攻撃に用ふる武器が變じた舊武器は鈍器であつたけれども新武器は頗る利器になつたのである而して吾吾の意

思の起る所は一には父祖の遺傳に依り又一には自己の生初以來の境遇に應化するとに依ると云ふとが分つて來た、それゆへ吾吾も全く他動物同様決して自由の意思を持って居るものではない全く遺傳と應化とに依て意思が必然的に起るのであるといふとは争ふべからざるとになつたのである。[Wehrhansel] 第一五頁第一五一頁

然るに、ここに甚だ奇などがある、それは外でもないカルス、ステルネ氏本名エルンスト、カラウセ(Carus Sterne; Ernst Krause)と云ふ有名な學者があつて *Werden und Vergehen* (生滅長消の義)と題する進化の書を著した人であるが此人が人間は進化に依て他動物に未だ會てない所の自由の意思を多少有するやうになつたから、善惡邪正の別を知て取捨するを得る者であると説いた是れは進化學者としては實に驚くべき謬見であるが、又有名な唯物學者ブエフネ

ル氏(Büchner)も *Kraft und Stoff* と題する書并に其外多くの書を著して因果主義を盛に主張した碩學であるけれども矢張同様に多少の自由意思を認許して居るのである是亦實に不思議なとであるカルネリー氏(Carner)は之を駁して假令極めて少許たりとも苟くも自由意思ありと認むる以上は彼れの因果主義は既に全く破れて遂に目的主義に陥つたものとせぬければならぬ彼れは到底哲學者とするには足らぬと言つた尤な議論である。(1)

- (1) Carus Sterne 著 *Werden und Vergehen* 第七七二頁 Büchner 著 *Kraft und Stoff* 第三三一頁 Carner 著 *Sittlichkeit und Darwinismus* 第一三二頁

常識で以て容易に意思の必然であると云ふとを悟り得べき事例を一寸ここに擧げて見やうと思ふ凡そ意思なるものは必ずしも一種に限るにあらずして時としては全く表裏反對の二種の意

思が同時に存在するところがある例へば一方に盛に飲食を欲する意思があるのに又他の一方に飲食の過度から起る害を恐れて務めて飲食を節しやうとする意思のあるとは珍らしくない即ち此場合には表裏反對の二種の意思が同時に存在して居るのである然るときは此反對なる二種の意思が遂にどうなる乎と云ふに此二種の意思の力が粗匹敵して何れも強ければ必ず互に勝たんと欲して劇しく競争せざるを得ない「嗚呼酒が飲みたい人の酒を飲て居るのを見ては、どうも我慢が出来ない嗚呼苦しい苦しい飲むべし飲むべし」やあ待て、まばし我輩は飲みだしたら到底少してやめるとは出来ない酔倒れる迄は、やめる譯にゆかぬ、さうすると又先日 of やうな大胃痛が起るに相違ない是れは斷然やめぬければならぬ斷じて飲むべからず、よすべしよすべし」待てまばし、さうは言ふものの是れが、どうして飲まずに居られやう彼れはあのやうな

大盃で以て鯨飲して居るではない乎我輩豈彼れに後れを取らんや胃痛を恐れて彼れに後れを取るは我輩終世の大耻辱なり飲むべし飲むべし快飲すべし鯨飲すべし」やあ待てまばし……「やあ待てまばし……」箇様な按梅に幾度も幾度も繰返して種種に考へる是れが即ち表裏反對して居る二種の意思の劇しい生存競争であるが儲最後に勝敗がどうなる乎と云ふに言ふ迄もなく比較的強い意思が勝を占めて比較的弱い意思が敗を取るのである、そこで飲みたい飲みたいといふ意思が比較的強くて勝を占めれば遂に飲むことになる若し又飲てはならぬと考へる意思が比較的強くて勝を占めれば遂に飲まぬことになるのである。

箇様な生存競争は幾らもある金を儲ふけたいと思ふ者が金を儲ふけるのは正道では逆もゆかぬ去りとして悪計を用ふれば刑罰が恐ろしい、どうしたらよからう乎悪計とても注意してやれば

容易に暴露するやうなとはなかるう、やるべしやるべし「いやいや」が許さない良心が許さないとをすれば左様なとをすれば道徳に背く良心が貴い「いやいや」さうでない少しは悪計をやつても金儲をせぬければ何事も出来ない目的は手段を擇ばずと云ふとがある、やれやれ「いやいや」それは大なる心得違ぢや……「いやいや……」と云ふやうに種種に迷ふとがある是亦反対意思の烈しい競争である而して其勝敗と云ふものは前同様全く兩意思の力の比較的強弱に依るのである。

孔子は克己復禮といふと言つたが是れは確かに表裏反対なる二意思の競争勝敗を證明するに十分なるものと思はれる何故と云ふに克己の場合には必ず正的意思と邪的意思との競争を豫定せぬければならぬ而して動もすれば邪的意思が正的意思に打勝たんとするのを正的意思が力を極めて遂に邪的意思を打負かす、それが即ち克己と云ふものになるからである、それでなければ克己と云ふ場合は起らぬのである、克己といふと何歟己れに屬せぬ他力を假て己れを制するやうに聞えるけれども實は己れが己れに勝つのである、詳述すれば己れの正意思が己れの邪意思に勝つのである。

孔子

若し意思が自由のものであるならば克己せんとする程の正人君子は容易に正意思をこそ起すべし決して邪意思を起すとはなかるべき筈なれども此の如き人にして尙克己の必要あるとを考ふれば意思は決して本人が自由に起すものでなくして必ず必然的に因果的に起るものであると云ふとは毫も疑のないとであると思ふ、して見れば孔子は既に暗暗裏に意思の必然を知て居たのである。

右の如く正意思が比較的強ければ正意思が勝ち邪意思が比較的強ければ邪意思が勝つのであるが、偕其強弱は如何なる原因に出る乎と云ふに或は祖先の遺傳に依るものもあらう又は自己の境遇からの應化に依るものもあらう若くは遺傳と應化との綜合的原因に出るものもあらうから其原因は種種であらうけれども鬼に角原因なしに起るものではないのである或人はいつも正意思を有し又或人はいつも邪意思を有し或は同一人でも或場合或事柄に就ては正意思を有し又他の或場合或事柄に就ては邪意思を有すると云ふともあらうけれども必ず已むを得ぬ原因が其人に存在して居るに相違ないのである。

但し右は表裏反對の兩意思が俱に存在して互に競争する場合を例として意思が毫も自由でない全く必然的に起るのであると云ふとを證明したのであるけれども此道理から推考して見れば兩意思の競争のない場合即ち意思が單一である場合と雖意思は必ず必然的に起るのであつて決して本人の自由に起すものでないといふことが明かにわかるであらうと思ふけれども競争のない場合には意思が容易に定まるゆへ吾吾自身には吾吾が自由に起すのであるやうに思はれるのであるといふとを知らぬければならぬ。

吾吾人間は凡ての有機體と同く全く自然的造物であるのみならず下等動物の遺裔であるから絶對的に自然法の支配を受けなければならぬのは固より當然のとであつて決して疑ふべき筈のないとであるのに基督教の如きは勿論其他哲學者すらも更に超自然法の支配を受けるやうに考へると云ふのは實にわからぬとであるが、そこで前述基督教者たるアウグスティン氏及びカルプ、ン氏が人間が唯一神の創造物である以上は絶對的に唯一神の支

配を受くべき者であつて決して自由意思杯のあるべきものでない全く唯一神の大意思の儘に生存して居るのであると言つたのであるが是れは固より取るに足らぬとであるけれども併し人間を全く唯一神の創造物と信じた以上は頗る理由ある主張であると思ふ被創造物が創造主の意思の外に自ら自由の意思で以て生存すると云ふ道理はない譯である、そこで假に此唯一神と云ふものを自然 (Natur) と云ふものと取り換へれば全く眞理に合するものになるのである人間が自然的創造物である以上は絶對的に自然法の支配を受けて生存するのは不思議などでも何でもなく當然のとであるから人間に別に自由なる意思のあるべき筈は決してないのである、それゆへ論法はアウグスティヌス氏及びカルティン氏の論法で聊か不都合はない唯唯神といふのを自然と云ふものと取換へさへすれば、よいのである餘りくどいやうである。

△
るけれども人間は生理上に於て毫末も自由はない肥へるも瘦せるも全く必然的である、それと同様に心理上にも毫末の自由はない生理と心理とは決して別物でない全く唯一であつて唯分業して居るだけのとである、して見れば生理上には自由はないけれども心理上には自由があるとするのは決して道理の立たぬとである。

△
併し右様に論じて來ると必ず一の大疑問が起らぬければならぬと思ふ、それは箇様な疑問である、吾吾の意思が右様に必然的原因があつて起るのであつて決して吾吾が自由に起すのでないならば吾吾には何事に就ても責任と云ふものはない善事をなすも決して賞すべき理由がなく又悪事をなすも決して罰すべき理由がないではない乎殊に責任のなき行爲に就て刑罰を加へると云ふが如きは實に残酷極まる不條理千萬などではない乎のみなら

ず此人間社會に道德法律杯といふものは毫も必要がないではない乎否全く有害無益とせぬければならぬではない乎云云箇様な一大疑問は必ず起らぬければならぬと思ふ。

此一大疑問は一應尤などである人間が善事をなすも悪事をなすもそれは全く必然的原因に出るので決して本人が自由自儘にするとしてないならば固より決して賞すべき理由もなく又罰すべき理由もないのである全く其通りに相違ない併し、それには又別に賞罰の必要になる道理が出て来るのである假令本人には賞すべき理由もなく又罰すべき理由もなくして唯必然的のよである。と云ふとが明瞭になつた上でも尙賞罰の必要である道理があるのである、それは以下に述べるであらう。

凡そ賞罰と云ふものの起りは必ず意思の自由を信じた上からのとに相違ない尤も刑罰の初めは復仇の意味があつたには相違ないけれども併し、それにしても必ず意思の自由を信ぜぬければ起りさうもないとである明かな過失に對しては決して復仇心の起るものでないところから考へて見てもわかるよである、併し今日心理學上で右述べたやうな必然的であると云ふ道理がわかつたにしても矢張賞罰は甚だ必要であつて其必要を道理は少しも、かはらないのである其譯如何と云ふに善惡の意思行爲は全く必然的に起るので決して本人の自由から起るのではないけれども此賞罰といふものが他日に於て本人及び他人の善意思善行爲を獎勵する一の大原因となるのである更に詳述すれば例へば忠孝は善意思から出た善行爲であるが此忠孝をなした人を賞するときには其賞された人は之を無上の榮譽として感ずる、そこで此感といふものが更に將來益忠孝を勵ます一大原因となるのである而して其事は特に本人の將來に於けるのみでなくして又他人の上

にも影響して来る一人が忠孝のために賞されるれば、それが又他人のためにも奨励となつて他人が其行爲に倣はんとするやうになる即ち其賞が本人及び他人の將來の忠孝を勵ますための必然的原因となつて其必然的結果を生ずるやうになるのである。罰の方も矢張同様である不忠不孝をして罰された人が罰は恐ろしいものである不忠不孝は再びすべきものでないと感じて来ると自然それが強大なる原因となつて最早決して左様なとすまいと云ふ意思が自然起つて来るのであるのみならず、それが又他人にも影響して他人にも同様な意思が自然起るやうになるのである左様な譯であるから賞罰といふものは善意思善行爲を奨励し惡意思惡行爲を懲戒するための必然的の一大原因となるのである是れが即ち人間に自由意思がなくても必ず賞罰といふものがなければならぬ道理である。

併し最初善行爲があつて賞された人が後には却て罪を犯すやうになるともあり又幾度罰されても少しも懲りぬ者もあり或は他人の賞罰を見ても少しも感ぜずして相替らず惡事をなす者もあるが是れは即ち父祖の遺傳に原因する歟若くは自己の境遇の應化に原因する歟又は遺傳と應化との二作用に原因するとして實に致し方がないけれども左様な譯で大に賞罰の影響のある者と又少しも影響のない者との違があつて種種の結果が起るやうになるとゆへ、それがために遂に意思は本人の自由に起すものであるといふやうな謬見が起つたのである道德の教を受けながら又法律の制馭を受けながら惡行爲をなすのは人間としてあるまじきとである人間たる者は必ず道德に遵ひ法律を守つて惡行爲を戒めぬければならぬ本人の心次第で如何様にもなるとであるのに動もすれば善を厭ひ惡を好むが如きは甚だ惡むべき所爲であ

るといふやうな考が起つたのであるけれども本人の心次第で如何様にもなると云ふとが甚だ誤た考である本人の心次第で如何様にもなるのではない必ず已むを得ない原因から出来るのであると云ふとを知らぬければならぬ併し道德法律や賞罰も亦此已むを得ない一原因となるのである即ち自己の境遇に應化するのである(絶對的とは云へぬけれども)から務めて道德を奨勵し法律を嚴正にして勸善止惡の手段を施さぬければならぬのである。

所がこゝに一種道德法律の制裁の聞き目のない人間が往往ある、それは精神喪失者と少年とである精神喪失者も少年も往往惡行爲をすることがあるけれども然るにこれに刑罰を與へても又他人の刑罰を示しても一向聞き目がない即ちそれに感ずる力がないのであるから其惡行爲の懲しやうも防ぎやうもない、それで餘儀なく其儘に棄ておくのである尤も少年の方は精神喪失者とは

違ひ其年齢に依ては多少聞き目があるに相違ないから或る年齢以上には輕き刑を施すことになるのである。

併し吳吳も心得ておかぬければならぬのは假令精神の十分確かな人と雖其意思が決して自由でないとは精神喪失者と少しも相違のないと云ふとである精神喪失者が決して自由に惡行爲をなすのでなく全く必然的理由からなすのであると同様に精神の十分確かなる者と雖矢張自由に惡行爲をなすのではない是亦全く必然的理由から惡行爲をせぬければならぬやうになるのである故に此點に於ては兩者少しも相違はない即ち兩者共に毫末の責任もないのであるが併し精神の確かなる者には刑罰の聞き目がある換言すれば刑罰を恐れるとが將來惡行爲を再びせぬやうになる必然的原因となるのであるけれども精神喪失者は事理を解する力のないところから少しも刑罰を恐れるといふ心がない

即ち刑罰の聞き目がなから、それゆへ彼れには責任を負はせて刑罰を用ひ此れには責任を免じて刑罰を用ひぬのである。此事は學理上では十分研究せぬければならぬ點である。

第四章 造化と進化

既に述べておいた如く古代に於てモーゼス氏の造化説と云ふものがある。是れは今日から見れば實に小兒だましの昔話としか受け取れぬものであるけれども、其後基督教にも傳はつて遂に後世迄信用され尚今日に至ても殆ど有力なものである。併し古代に於ては猶太の外にも殆ど同様の話はあつたのであるけれども、特にモーゼス氏の造化説のみが今日迄も信用を受けて居ると云ふのは全く基督教の力の大なるに依るものと思はれる。併し箇様な昔話は別としても、古來近世に至る迄天地萬物は何歟超自然的な

勢力で以て目的的に造られたものであるとの考は如何なる人種民族も有して居たのである。而して吾吾人間は最初より人間として各種動植物は最初より各種動植物として各目的的に特造(Selbständige Schöpfung)されたものと考へ居たのである。

第十八世紀の有名なる植物學者リンネ氏(Linne)の如きは從來の植物學を一新した碩學であるけれども、此人でさへ矢張モーゼス氏の造化説を信じて植物の各種は最初よりそれぞれに特造されて今日に至るものと考へた程のとである。が併し此人は他の空想論者とは違ひ學術的に研究した人であるから植物の所謂變種(Bastard)は互に異なつた正種の雌雄的結合から新に出來たものであらうとの考を起したのである。

然るに既に述べた如くラマーク氏とダーキン氏との發見に依つて動植物は決して最初よりそれぞれに特造されたものでなく最

初は唯極めて簡單なもののみがあつたが、それより漸漸進化に依つて種種の高等物が出来て来たのであると云ふとが始めてわかつた、そこで古來の萬物特造説といふものは次第に勢力を失つて進化説が、それに代はるとなつたのである。ダーキン氏は有機體は最初極めて簡單なるものが僅僅一二種だけ生じたのが其後の進化に依つて夥しい高等有機體及び最後に吾吾人間が出来たと説いたが、又ヘッケル氏は更に動物進化の系圖を研究して最初モネラ(Monera)と稱する極めて簡單なる一始祖より漸漸進化して高等動物最後に吾吾人間が出来たと考へてモネラより人間に至る迄の代數を二十五代であるとして委しく説て居るのである。其著 Natürliche Schöpfungsgeschichte 第七一四頁此系圖が正當である乎どう乎余輩には分らぬけれども蓋し中らずと雖遠からずであらうと思ふ。凡そ進化と云へば通常有機體の進化のみを指すのである。

ども併し進化は、そればかりでない進化には三大種類がある第一は宇宙天體の進化(Kosmogenie)第二は地球凡ての無機體の進化(Geogenie)第三は有機體の進化(Biogenie)此三種類であつて此第三類の有機體の進化は又體軀的と心神的と社會的との三小種類に分かれるであらうと思ふ而して第一類なる宇宙天體の進化の學は重にもユール、ヘルニクス氏、ラブラース氏杯の宇宙系統説やカント氏の天體瓦斯説の研究から始まり又第二類なる地球の進化の學は重にもライエル氏(Lyell)の地質學上の研究より始まり又第三類なる有機體の進化の學はラマーク氏やダーキン氏の生物學上の研究から始まつたのである。

但し余の講述せんとする進化は單に第三類の進化で其中でも重にも社會的進化更に又其中でも重にも道德法律の進化を目的とするのである、それゆへ第一類第二類の進化には先づ關係がな

い余は、それ等の進化に就ては殆ど知識がないのである序ながら一寸此事を斷つて置く。

諸従前の學者は造化といふとを知て居て進化といふとを知らなかつたモ、モーセ氏の造化説は殆ど小兒の昔話見たやうなものであるから固より齒牙にかくべきほどのものでないが併し、それとは全く關係を持って居らぬ哲學論でも又印度や支那の理論でも漠然と造化を論ずるのであるが其方は却て一寸聽くに足るやうなともある實在だの絶對だの眞如だの大極だのといふのは皆造化の大根源であるやうに見えるけれども進化といふとを知らぬのであるから此造化の大根源に何も角も既に全備して居るやうに説くのである即ちそれが彼の目的主義である造化力を全く目的的に働くものと認めるのである。

そこで造化は既に正義的のものである道義的のものである仁慈的のものであると考て造化には宛かも至正至公なる大意思があるものやうに信じて居るのであるがそれが抑の迷見である正義道義仁慈杯いふものは共同的生存即ち社會的生存といふものがあつて、そこで始めて生ずる筈のもので純乎たる自然界には未だ全く生ぜぬのである尤も右等の造化説でも禽獸界に正義や道義があるとは言はぬけれども人間界には本來正義道義が自然に存して居るものでそれが即ち造化の目的であるといふやうに認めて居るのであるが是れが即ち造化を知て進化を知らぬ迷見の結果である進化が即ち造化である進化の外に造化なるものは決してないといふとを知らぬから右様などに陥るのである。

佛教の地獄極樂だの六道輪廻だの善惡因果だの又基督教の天堂地獄だの世界最終の賞罰だのを固信する愚昧の徒は措て論ぜずとしても儒家や哲學者に至ても尙天の賞罰と歟積善積不善の

餘慶餘殃と歎云ふとを信じたり又は祈禱杯をして頻に福利を求めたり災厄を免れやうとする者は決して少くないのみならず専ら自然法をのみ信ぜぬければならぬ筈の自然科学者にさへも簡様な人が澤山あるといふのは實に驚くべきことである是等は畢竟皆特に造化を信じて進化を知らぬからのとである否假令進化を知ても未だ其道理を十分究めぬからのとである。

宇宙の自然には善惡もない正邪もない仁不仁もない唯自然である善惡正邪仁不仁の別のないところが是れが即ち純乎たる自然といふものである而して進化に依て共同生存上に始めて善惡正邪仁不仁の別が生じて來るのである但し是等の事に就ては本論に至て委しく述べるであらうから、ことには最早論ぜぬであらう。

第五章 有機體の根本動向に關する二元主義と

一元主義

凡そ有機體には三種の段階がある低い方の段階から順序が立ててあるとて第一段階が單細胞的有機體 (Einzellige Organismen oder Protistin) と云ふものでモネラ又はアミーバ (Monera 及び Amoebina) の類であり第二段階は此單細胞的有機體の多數から組成された複細胞的有機體 (Vielzellige Organismen oder Histonen 即ち通常の植物動物にして植物にあつては Spore 動物にあつては Personen と稱す) であり又第三段階は此複細胞的有機體の多數から組成された複細胞的有機體 (Stocke oder Corinus) であつて是れも植物動物ともにあるが動物では社會的生存をなして居る動物團體 (Herden der geselligen Thiere) 就中蟻及び蜂の團體 (Stocke der Bienen und Ameisen) 等并に吾善人

間の國家である余が明治三十六年に出版した「道德法律進化の理」の第三版に「生物學者は吾吾人間の國家を未だ第三段階の有機體であるとは認めて居らぬけれども余は第三段階の有機體であると假定する」と述べておいたが其翌明治三十七年即ち西曆一千九百零四年に出版になつたヘッケル氏の *Lebenswunder* と題する著書(第二六八頁には明かに吾吾の國家を第三段階の有機體であると述べて居るのである即ち余の説がそれと暗合したのである)。

右様な譯であるから第三段階を組成する第二段階有機體は即ち第三段階有機體の細胞 (*Zelle*) となつて居るのである、それゆへ吾吾人間は國家の細胞となつて居る譯である第二段階有機體たる吾吾人間の體軀を組成して居る細胞(即ち本來の細胞にして第一段階有機體なり)が實に生命を有して居る一個獨立の有機體であるとは國家を組成して居る吾吾人間が實に生命を有して居る

一個獨立の有機體であるのと少しも相違がないと云ふとは彼の細胞病理學 (*Cellularpathologie*) の發見者たる *フイルヒョー* 氏が始めて言つたところである併し唯其相違といふはヘッケル氏の言つた如く (*Lebenswunder* 第一六八頁) 第二段階有機體の各細胞は其體軀が互に密着して居るけれども第三段階有機體になると其細胞の體軀が密着せずして唯其利害のみが密着して居るものがある即ち蜂や蟻の社會でも又吾吾人間の國家でも其細胞たる蜂や蟻や又は吾吾人間の體軀は互に密着しては居らぬが唯其利害が密着して居るのである。

右第一段階有機體は多數集合して第二段階有機體を組成し又第二段階有機體は多數集合して第三段階有機體を組成するのであるけれども併し又上段階の組成分子とならずして全く孤立して居るものは却て多いのである尤も第二段階有機體たる吾吾人

間は國家の組成分子とならずして全く孤立すると云ふとは決して出來ぬのである。

諸此各段階の有機體は皆身心の二つを具有して居て此二つが各生存力を持つて居る而して身的生存が生理に屬し心的生存が心理に屬するのは固より言ふ迄もないとであるけれども併し此二個の生存が決して相離れた二個の生存と言ふ譯ではない全く一個の生存であつてそれが二様に顯現するのである従前は心理を生理とは全く別物としたけれども今日の科學の大進歩に至ては心理を生理の半部と認めるやうになつた即ち従前の二元主義が破れて一元主義となつた。

植物や單細胞的動物にも既に微小なる心神 (Seele) の存するに就ては近來テオドール・フエフェネル氏マキス・シュルツェト氏マキス・フェルオルン氏 (Theodor Fechner, Max Schilze, Max Verworn) ヘルケル氏

等其他生理學者生物學者等の研究經驗に依て既に明瞭となつたとであつて隨て細胞の心神 (Zellseele) と云ふとをさへ唱へるやうになつたのであるから苟くも有機體たる以上は皆體軀の外に多少の心神を具有して居るといふとが分つた是等のとに就ては今詳述する暇はないけれどもヘルケル氏の種種の著書就中其新著なる *Welträttsel* 及び *Lebenswunder* と題する書に委しく論じてあるが此甲の方の書は「宇宙の謎」と題する翻譯書が出來て刊行になつて居るから歐文の讀めない人でもそれを讀めば大體の事柄はわかる。

諸此各段階の凡ての有機體は皆自己の維持と發展 (*Selbsterhaltung und Selbstentfaltung*) 即ち約言すれば自己の生存の利益 (*Eigenes Lebensinteresse*) を遂げんとする動向を固有して居る苟くも生存のあり以上は必ず此動向を固有して居るといふとは是れは既に自明

の事であらうと思ふ決して是れに反對の議論は出まいと思ふ尤も此動向は細別すれば千萬無量になるでもあらうけれども併し畢竟ずる所自己の維持發展と云ふ一點に歸するのであらうと思ふ、それゆへ余は之を唯一の利己的根本動向(Der einrige, egoistische Grundtrieb)と稱してよからうと思ふ。

然るに世の學者は多くは此唯一の利己的根本動向を是認しないのである否之を全く是認しないと云ふのではないが唯此動向が唯一であつて外に他の動向のないと云ふとを是認しないのである尤も人間外の動物に就ては是認するけれども獨り人間に就てのみ是認しないで人間には自己の利益を遂げんとする動向の外に尙他人の利益をも圖らんとする動向が固有されて居ると主張するのである、それゆへ獨り人間のみには二種の根本動向があると云ふ主義になるのである是れが大なる謬見であると思ふ併

し進化學の未だ開けなかつた時代ならば、それも尤のやうに思はれるけれども進化學が既に開けて人間の決して特造物でないこと云ふ道理のわかつた以上は左様な道理は決して立たぬのである是れは後に説く所でわかるであらう。

そこで唯一の利己的根本動向なるものは生理的と心理的との二部に分れる即ち體軀上の維持發展と心神上の維持發展との二つになるのである併し此二部が全く相離れて居て相互の關係がないと云ふ譯では決してない唯分業的に働くのである、が併し植物又は下等の動物にあつては重もに生理的に働き又高等動物にあつては生理的の外に心理的に働く力も甚だ盛であつて就中吾人間に至ては其力が最も大なるのである、又此利己的動向には無意識的のものと意識的のものとの二種がある生理的動向の無意識的であるのは無論であるが心理的動向の中には無意識的と

意識的との二種があるのである。

此唯一動向は前述の如く細別すれば千萬無量になるのであらうけれども其中で最も重なるものを擧ぐれば自養動向及び生殖動向 (Selbsternährungstrieb und Fortpflanzungstrieb) の二類となるのであつて甲は自己の一身を養ふ動向乙は子孫を擧ぐる動向であるが併し此二類共に全く自己の維持發展を遂げんとする唯一動向に外ならぬのである孟子が食色は性なりと言ひ又禮記に飲食男女は人の大欲存すとあるのは即ち此二類の動向である又大詩人シッレル氏 (Schiller) の詩に哲學上の議論は如何もあれ今日迄は飢餓と戀愛 (Hunger und Liebe) とに依つて世界の機械が動く (1) とあるのは即ち此二類の利己的動向の盛なる力を説いたのである。

(1) Einsteilen bis den Bau der Welt

Philosophie Zusammenhält,

Erhält sich ihr Getriebe

Durch Hunger und durch Liebe.

余が斯く斷言するときには必ず反對論者があつて吾吾人間社會には利己の外に更に利他が盛に行はれて居るではない乎人間社會は決して利己で治まるものでない人間社會の治まるのは全く利他に依るのであると主張するでもあらう是れは尤な議論である余とても人間社會が利他なしに治まるものであるとは決して考へぬ社會の治まるのは實に利他に依るのであるけれども余は反對論者同様に此利他を純粹の利他とは認めないのである利他なるものは畢竟利己の稍變性したものに過ぎぬそれゆへ矢張利己であると考へるのである純粹の利己が或る狀況に依つて稍其性を變じて利他的形状を取つたものと信じて居るのであつて其理由は進化學で十分説明の出来るものと思ふのである。

それゆへ進化學に依て概略説明して見やうと思ふのであるが凡そ宇宙の現象は前述の如く全く因果的に起るもので決して目的的に本來定まつて居るのではないが併し因果的に起るのに就ては必ず其起らぬければならぬ必要が生じて來るから起るのである一寸必要と言つたばかりでは分らぬが換言して見れば必ず「左様なくてはならぬ」といふとが即ち必要といふものである是れが即ち自然法といふものである。

そこで有機體の凡てに固有である利己的根本動向若くは利己的意思から利他的動向若くは利他的意思(意思とは即ち動向の心理的に進化したものであるから専ら動物就中高等動物に就て言ふのである)の生じて來るといふ現象換言すれば利己が其性を變じて、それから利他が生じて來るといふ現象も全く右の必要即ち「左様なくてはならぬ」と云ふとから生じたのである若しも此左様

なくてはならぬ」といふ理由がなかつたならば決して利己から利他の生ずる筈はないのである本來は利己のみで不都合はなかつたのであるが利己のみではゆかぬ必ず利他が生ぜぬければならぬといふ必要が生じて來たから、そこで利他が生じたのである否利他が生じたといふ譯ではない實は利己が稍性を變じて利他の形を取つたのである、それゆへ此利他也其本性は矢張利己である決して本來の利他ではないのである。

而して其必要が生じたのは如何なる故である乎といふに即ち共同生存 (Zusammenleben) といふものが生じたからである有機體が孤立生存 (Einzelleben) をなして居れば利他が少しも必要でない唯自存の計をなせば、それでよろしい自己の本性の許す限り自己の力の及ぶ限りに於て自己の利益即ち維持と發展とを遂ぐるとを専らとすればよろしい苟くも自己の利益に妨害があれば此妨害

を防がんが爲めには他體を害して少しも不都合はないのみならず只管自己の利益を獲得せんがために故らに他體に妨害を及ぼしても少しも差支はない唯一に自己の利益をのみ視て他體の利害は毫も顧みる必要もない責務もない去りとして又自己の利害に關係なき場合に他體を妨害する必要も決してないのであるから只管自己の利害のみに依て行動すればよいのである、それゆへ孤立生存に於ては正邪善惡杯云ふ沙汰は少しもないのである、但し箇様に説て來ると全く心理的意識的行爲のみに就て言ふやうに聞えるけれども生理的無意識的の事に就ても矢張同様である例へば生力の強い植物は近處にある弱い植物の領分を犯して根を張る是れは重もに生理的利己であるけれども又狡猾ある動物が愚昧なる動物の占居地を詐欺的に奪取するが如き心理的利己と少しも異なつた道理はない此の二つの場合の相違は一は重もに

生理的無意識的であるのと他は重もに心理的意識的であるのことに存するのであつて利己の理に於ては全く同一である。

然るに共同生存をなすやうになると左様な譯ではゆかぬとになる孤立生存と同様に全く純乎的利己(Reiner Egoismus)では到底共同生存は出來ないのである、そこで共同生存とは如何なるものである乎といふに吾吾人間の國家的社會が共同生存の最も完全なものであるが他の動物界にも共同生存は随分澤山ある即ち前述第二段階の有機體が集合して第三段階の有機體をなして居るのがそれであるが又第一段階の有機體即ち本來の細胞が集合して第二段階の有機體即ち動植物を形成して居るのも矢張共同生存である、此集合に依て一つの大きな有機體を形成するといふのが即ち共同生存といふとである、が併し必ずしも一の全有機體を形成するに至らず唯其全有機體の一部分を形成するだけでも一の

共同生存と言ひ得られないとはない即ち一の親族は一の有機體となつたのではないけれども是れも一の共同生存には相違ない。

共同生存には重もに生理的のものゝ重もに心理的のものゝの二類がある重もに生理的のものゝ就ては後に述べるであらうが今先づ重もに心理的のものゝ就て其起りを考て見るに蓋し母子の共同生存が其起りであらうと思はれる彼の無兩性的生殖(Mono-sonie)と稱して雌雄の交接に依らずして生殖する有機體の種類は別として兩性的生殖(Amphigonie)に屬する動物には卵生と體生との二種があつて明かに母子の關係が存して居るけれども卵生の中で自然の溫度で孵化する動物では母子の關係は殆どわからぬ母子はあつても孰れが子といふとも分らない然るに母の體温で孵化するものになると母子はよくわかるのみならず孵化後或る生長期間即ち子が獨立生活の出來ぬ間は母は子を看護する隨分

心を用ひて看護するのである況て胎生の動物に至ては猶更のことである丘淺次郎博士の著進化と人性(第一一四頁)に動物が其子を教育するとに就て委しい説が出て居る。

此看護といふものは母が其子を全く自己と同體視する即ち他體と思はぬ程の情があるから出來るのであつて即ち其實は全く利己である利己が稍其性を變じて利他となつたのみのものである決して元來の利他とは云へぬのである故に是れが即ち利他の起りと言つてよろしいと思ふ母と子との共同生存即ち親族的の共同生存は利他と最も密接な關係を持つたものである併し此共同生存は大抵は子の獨立生存の出來ない間のみで既に獨立生存が出來るやうになれば最早消滅するから利他も亦消滅するのであるが併し兎に角此親族的共同生存が利他の最先起源であるに相違なし。

然るに此利他の性質の研究をもせず母子の間には當然利他があるものと云ふやうに考ては甚だ間違つたとである能く研究して見れば必ず其由て来る所が分らぬければならぬと思ふ然るに世の學者は多くは唯此利他を天然母子の間に賦與された當然の利他と看做して外に研究を用ひないのである。

尙委しく説て見やう此母子の間に起る利他なるものが決して本來の利他といふものではない全く利己から生じて来る利他であるのみならず尙全く利己の本性を保有して居るものである尙換言すれば其實は全く利己に外ならぬものであると斷言せぬければならぬと思ふ何故といふに母が子を決して他體視せず全く自己と同體視する全く自己と同じやうに考へる其同じやうに考へる所からそれを愛するのである、そのために勞するのである決して他體として愛するのではない他體のために勞するのでは

ない、して見れば其實決して利他ではない全く利己であるといふ道理になるのである唯進化して利他の形を取つた所の利己として認めるのが當然である故に余は之を變性的若くは進化的利己 (Modifizierter oder entwickelter Egoismus) と稱するのである母は子のために勞せぬければ自己の心は決して安んぜぬ如何程勞しても勞する程自己の愉快を増すのであるから之を唯利他である決して利己でないとは如何にしても言ひ得られぬではない乎箇様な議論は實に淺薄なる議論と云はぬければならぬと思ふ

近世の大哲スペンサー氏 (Spencer) の如きは利他に就て更に奇妙な説を立てて居るのであるが其説に據れば有機體から芽體や卵や又は胎兒 (Knospe, Ei, Fötus) の分離するのだの又は母が生兒に乳汁を與ふるとだのの如きは皆母が生兒の利益のために自己の體の或る部分を減損する譯であるから是れは物理的利他行爲 (Physisc-

he Altruismus)である而して此物理的利他行爲から次第に自發的利他行爲 (Ankonatische Altruismus) 即ち無意識的に起るものなりが生じ更に進化して遂に意識的利他行爲 (Bewusste Altruismus) が生ずるのであるが斯く考へて見れば利他も亦利己と共に原始有機體以來既に存して居るもので此兩心は爾來相俱に進歩したとである其著 Die Thatsachen der Ethik. Vetter. 獨譯第二一九頁

「併し是れが大哲の大なる謬見であらうと思ふスペンサー氏は母が生兒の利益のために自己の體の或る部分を減損すると言ふけれどもそれが第一間違て居ると思ふ此或る部分といふのは是れは決して母體に必要なものではない全く種の増殖のためのみ必要なものであるから母體からは減損といふとは出来ない却て増殖と云はぬければならぬして見れば母が兒の利益のためにするのではなくして母は唯己れの種の増殖をなすものと見てよ

ろしい(否必ず左様見ぬければならぬ果して然りとすれば是れは決して物理的利他行爲ではなくして全く物理的利己行爲となるのである是れはまだ少しも利他的にならぬ純粹の利己行爲と認めぬければならぬものであると思ふが併し此の如き利己行爲に次で直に出て来るものは利他行爲である利己から始めて利他が出て来るのである動物の母が其子に對する行爲が即ちそれである母子が既に別個體となり了はつた上は母の子に對する行爲は單に利己とは言へぬ既に利他の稱を與へぬければならぬものになる。

偕右論じた如く動物の母子間に或る期間共同生存と云ふとがあつて母が大に子を愛するのであるが併し是れは決して純粹の利他といふものではなくして實は利己の少しく性を變じたものである尤も動物界の共同生存は決して右の如き母子間の暫時の

共同生存に止まつて居るのではない同種の動物にして短時間又は長時間共同生存をなすものは随分多い是れも矢張親族的共同生存であつて其稍大なるものである吾吾人間にあつても原始時代の共同生存は唯同民族 (Stamm) 中の一小部分に限つたものであつて是亦親族的共同生存であるが親族的共同生存の起るといふものは個人の間互に親愛の情があつて其情が種種の事情につれて益厚くなるところより起るのである併し其親愛の情といふものが決して他人に對する情といふものではない其實他人を第二の吾れと考へるから自己自身に對する親愛に類似した親愛が起るのである他人が殆ど吾れと一致するものになるから其吾れと一致した他人を親愛するとそれが自己の快感を生ずるのである矢張動物の母が其子を全く自己と同一視する情と同じとなのである尤も其情が母子の情ほどに厚くないとは言ふまでもない

けれども矢張先づそれと性質を同じくして居る情である而して愈共同生存が整つて來ると左様な情は自然淘汰に依て漸次に増して來る、それゆへ遂にそれが全く本來の利他である歟のやうに見えるものになるけれども能く其根源を探て見ると、それが決して本來の利他ではなく全く利己の稍變性したものであるといふとがわかるのである否わからねばならぬ筈である。

共同生存に依て社會が進歩して來ると簡様な親愛の情即ち利他心は漸次遺傳 (Vererbung) して來るのであるが、そこで簡様な性を又社會的本能 (Soziale Instinkt) とも云ふのである而してここに至ては特に共同生存をして居る民族内、國民内のみならず遂には一般人類にまで利他心が及ぶやうになるのである尤も本能といふと本來固有の能力であるやうに聞えるけれども、そればかりではない本能には本來のものとの得有のものとの二種がある其事は後に

委しく話すであらう。

右述べた所の利他は感情上から起る利他であるから余は此利他を感情的利他 (Gefühlsaltruismus) と名付けたのであるが尚其外に知略上から起る利他がある人間の知識が追追に進て來ると共同生存の上に於て他人の事を他人の事と看做さず殆ど自己の事と同様に親切にするとそれが爲めに大に他人の信用を受けるやうになるからそれが又自然自己の利益になると云ふことを知るやう所謂情は人のためならずと云ふ道理を發明するやうになる、そこで又箇様な知略上の點からも利他行爲をするやうになつたのであるが此種の利他行爲が其實全く利己行爲であるとは感情的利他よりも更に著しいとて且つ世間大抵の利他は此種類に屬するのである余は之を知略的利他 (Kluger Altruismus) と名付けた。

此感情的知略的の二種の利他は特に吾吾人間にのみ存するの

ではない高等動物にも多少あるのであるが併し吾吾人間には此二種利他共に積極的に發動するけれども動物にあつては多くは唯消極的に發動するのである換言すれば人間にあつては實際他人のためになるとをするのであるけれども動物にあつては他體のうなとをせぬと云ふとに止まるのである他體の害になるやうなとをやめると云ふとに止まるのである併し稀れには又他體のためになる事をするともあると云ふ話もある即ち人間同様に積極的の利他行爲をするとも稀れにはあると云ふ話もある。

然るに人間にあつては右二種の外に尙利他の一種類がある、是れは余が被教養的利他 (Anerzogener Altruismus) と名付けたものであるが是れは宗教や徳教で故らに養成して起す利他心である宗教や徳教は人間には兎角純粹の利己心が強くして利己心から出る

利他心即ち變性的利己心の弱いのを歎て之を矯正せんがために古來種種に力を盡して居るのである併し宗教や徳教の力が如何に強いとしても人間の天性にないものを以て養成するとは出来ぬから其養成に就ては矢張人間の唯一なる根本動向を利用して居るのである換言すれば人間の利己的動向に十分なる満足と與へるやうにして利他を奨励して居るのである。

例へば忠孝は人たる者の善行であるから必ずなさぬければならぬ忠孝をすれば神佛の冥助もある又社會でも幸福を得られるけれども若し之に反して忠孝の道に缺けるやうなとがあれば神佛の罰をも免れるとは出来ぬ又社會からも擯斥されると云ふやうに説て忠孝を奨励するのである其外忠孝以外の善事に就ても又同様なる趣旨で教訓するのである古來如何なる宗教徳教といへども箇様な方法に依らずして善行を勧め悪行を懲さんと企て

たものは一もないのである、して見れば宗教徳教が古來全く吾吾人間の唯一なる根本的利己心を利用して以て利他を奨励して居ると云ふとは實に争ふべからざる事實である此事は特に十分注意すべき點であると思ふ。

のみならず右述べた所の道理は今日の進歩した倫理學にも適當して居ると思ふ倫理學は神佛の賞罰や社會の制裁を恐れるために善をなせ悪をやめよと勸むるものではない唯善をなすのは吾吾人間たる者の當然なすべき本務であるから善は必ずなさぬければならぬ悪は必ずなしてはならぬと云ふやうに教訓するの比あるが能く其教訓の理を考て見ると全く吾吾人間を眞の人間に養成すると云ふことになる吾吾が眞の人間になると云ふとほど吾吾に取て大なる利己はなからう吾吾の利己心の満足は此上の事はなからうではない平して見ると箇様な倫理教の旨趣も亦全

く利己心を利用して以て利他心を奨励するものに外ならぬと云ふとが甚だ明かであると思ふ。

「箇様に段段論じつめて來ると利己の外に本來利他なるものが存在して居るのであると云ふ道理の謬て居るとは既に十分明かであらうと思ふ。」ルフェティウス氏(Helvetius)は利他は掩蔽されてある利己であると言つた至極面白い言ひ方であると思ふ併し尙一の疑問が起る歟も知れぬと思ふとがある、それは如何なると乎と云ふに利他が果して右の如く利己であるならば吾吾人間の如く進化の最上點に迄達した者は容易に利他行爲をなすやうになりさうなとであるのに事實は、それに反して兎角純乎的利己のみ盛であるのは何故であらう乎との疑問である是れは一應尤に聞えるけれども、それには又十分の理由がある吾吾は本來唯純乎的利己のみを具有して居た無社會的動物の遠裔であるから其遺傳の

容易に去り難い故であらうと思はれる遺傳の力といふものは非常に強いものであるから今日大進化をなした吾吾人間の上にも尙大なる力を持つて居るものと見える。

若しも大進化をなした人間が容易に利他をなすならば別に道德法律がなくとも差支ないであらうと思ふ、けれども右の如く利他が容易に行はれぬのであるから餘儀なく道德法律が必要になるのである、そこで又ここに道德法律が如何にし起つた乎といふとに就て論ぜぬければならぬとになつたのであるが是れは蓋し人間たる者の通有性と及び各民族各國民等の特有性とに基いて出來たものであらうと思ふ、而して此通有性と此特有性とが内外の種種の生存競争や開化の進歩發達や又は其他種種の自然的及び社會的現象の影響を受けて即ち約言すれば自然淘汰と人爲淘汰との作用に依て漸次に起つて又漸次に發達したものであると思はれ

る。それゆへ道徳も法律も決して本來一定して居るものではない。開化の程度に依て種種に變遷進化して來るものである故に古代の道徳法律に於ては今日とは違て社會の權勢を握つた者即ち君主や貴族や又は男子には随分純乎的利己行爲をも許して卑賤なる人民や無力なる女子を壓制せしめたのであるが是れは當時は社會の進歩のために必要であつたともあるのである。

特に古代に於てのみならず今日の開明社會に於ても純乎的利己が全く不必要と云ふとは云へぬのである。何故と云ふに若しも純乎的利己が全くなかつたならば個人の獨立自由といふものは殆ど絶無となるのである。個人が自己の權利を主張して自己の地位財産等を保護するといふとは全く此純乎的利己に依るのである。假令法律の力が是等の保護を十分なすとしても個人自身に保護の力がなければ決して十分の安全は得難いのである。が併し此

純乎的利己行爲といふは自己の利益のために他人の利益を無視するやうな極端なる利己ではない。唯他人の利益を犯さざる限りに於て自己の利益を主張する利己である。それゆへ彼の孤立生存的の利己とは大に違ふ所があるのである。有名なる法律學者エーリング氏 (Meining) は *Der Kampf ums Rechts* と題する書を著して自己の權利を十分に主張するの必要を説いた。

然るに佛教又は基督教の如きは箇様に必要な純乎的利己をさへ殆ど許さぬ。其證據には佛は只管慈悲忍辱を貴び基督は若し一方の頬を打つ者があらば更に他の一方の頬をも打たしめよと教へるのである。是れでは到底個人の獨立自由と云ふものの成立すべき道理がない。佛基の如きは全く個人といふものを滅絶せしめんとするものであるから實際其通り行はれるとは決してないのである。哲學者中でもシャフツベレー氏ハチソン氏ショーペン

ハッセル氏 (Shaftesbury, Hatcheson, Schopenhauer) の如きは殆ど全く利己を擯斥するのである。又吾が邦でも近來頻に無我愛と歎云ふとを唱へるものがあるが實に道理のない話である。無我と云へば我を亡ぼして仕舞ふので愛といふ働の出る主體がなくなるではない乎。主體なしの愛とは實に奇怪のとである。西洋でも *Selbstlosigkeit*, *Selbstverleugnung*, *Selbstaufopferung* (無我、斥我、犠我) といふ言辭があるが實に道理の分らぬとであると思ふ。

一寸ここに利己利他と道德(法律も共に)との關係に就て述べぬければならぬとがあると思ふ。利己利他といふものは是れは主觀的個人的ものであるが道德と法律とは客觀的社會的のものである。然るに個人の利益と社會の利益とは必ずしも一致すると云ふ譯ではない。或は一致し難いともある。それゆへ道德法律は必ずしも利他と云ふとにのみ重きを置くとの出來ぬ場合がある。前述

の通り古代にあつては權勢の強い者が往往權勢弱い者の利益を害するやうな純乎的利己を専らにしたともあるが是れが社會の爲めに隨分必要とがあつた併し權勢者が其必要を感じて左様したのではないけれども實際必要とがあつた此事は今ここで詳論すると餘り長くなるから後に述べるとであるが左様な譯で其時代の道德と法律とは多少今日に於て有害とするやうな利己をも許したのである。又今日と雖社會と個人との利益の一致し難いところがあるときには國家的權力で個人又は團體の利益を損ずるやうなものは隨分ある必ずしも利他のみに偏する譯にはゆかぬ畢竟は社會の利益といふとを重要視せぬければならぬのである。是れは、どう云ふ道理歟と云ふに既に述べておいた如く個人たる第二段階の有機體は社會たる第三段階の有機體を形成する細胞であるから如何にしても第三段階の利益を主とする必要があるとな

るのである他の第三段階有機體を形成する細胞たる第二段階有機體も又第二段階有機體を形成する第一段階有機體も矢張同様に上段階有機體の利益のためには往往自己の利益を奪はれるのである左様なければ上段階有機體の成立するとは出来ぬから是れが自然法であると見える。

去ればとて全體を形成する細胞は全く軽いもので特に全體のみが重いものであると一涯に斷言するとは決して出来ぬ一寸皮相では細胞は唯全體形成の手段となるのみのやうに見えるけれども併し其集合に依て全體が成立すると細胞も孤立生存の時に於けるよりも更に大なる安全を得るのであらうと思はれる、して見れば兩者は互に手段ともなり目的ともなるのであつて決して大なる輕重はないけれども孰れ歟と云へば細胞よりも全體の重いと云ふとは當然であらう、それゆへ細胞が全體のために用をな

すと云ふとは全體が細胞のために用をなすと云ふとよりも更に當然のとであらうと思はれる、であるから第三段階有機體たる國家に於ても此道理は同じとて國家の利益は個人の利益に比して更に重いとになるのである、けれども通常の場合に於ては特に其輕重を論ずる必要を見ぬのであるが唯時として國家の利益と個人の利益との牴觸矛盾するやうなときのあるときには其輕重論が甚だ必要となる即ち此の如き場合に方つては個人の利益を全く國家の利益の犠牲に供せねばならぬとにさへなるのである、此道理から考へると極端なる國家主義も謬見であるけれども又極端なる個人主義は更に大なる謬見となるのである。

以上述べたところで利己利他相互の關係と并に利己利他と道徳との關係は粗分つたであらうと思ふ、が併し是れ迄の所は専ら心理的に屬する利己利他のみであるから是れから又一寸生理的

利己利他に就て述べぬければならぬ第二段階有機體の細胞が互に化學的に集合するのは確かに生理的利他といふものであると思ふ既に述べた如く此細胞も亦一個の獨立生活を持つて居るものであるから隨て彼の利己的根本動向を具へて居るのであるが是れが孤立生存であれば全く純平的利己で差支はないけれども既に集合して共同生存をなすに就ては必ず此純平的利己から變性的利己即ち利他が生じて來ぬければならぬそれではなければ共存と云ふとは決して出來ぬのである此生理的利他なるものは所謂細胞の吸引力(Cellulare Attraktion)であらうと思ふ兎つ彼の生理的利己があつてそれから此生理的利他が生ずるとに依て始めて生理的共同生存が出来るのであらうと思はれるベッケル氏も其著「*Lebenswunder*」(第四七八頁)に單細胞體が相集合すると始めて自己の自然的の利己を制限して集合全體の利益のために利他をなさぬ

ければならぬやうになる是れが即ち道德の生理的に生ずる最先起源であると説て居るのであるが此説は余の説と大に一致して居るベッケル氏の此著書は一千九百零四年の出版であるが余は其前年即ち九百零三年に「道德法律進化の理」の第三版(第一九頁)に箇様に述べておいた曰く第二段階有機體たる動植物を組成する細胞并に第三段階有機體を組成する複細胞體の個個相互の間にも多少の利他ありとせざるを得ざるが如し若し然らざれば到底集合をなす能はざるは當然なればなり然れども(略中)之を心理的と認めんよりも寧ろ生理的と認むべきものならん是れが余の述べた所であつたがベッケル氏の論と全く異なる所はないと思ふ生理的及び心理的利他は皆必ず必要があつて唯一根本動向たる利己から生じたといふ道理は以上述べた所で粗明かであらうと思ふ既に述べた如く凡そ宇宙の現象は必ず因果的に自然的に

起るものであるから必ず左様なくてはならぬといふ必要があつて始めて起るもので全く其必要なしに起るものではないのである。有機體の孤立生存には利己こそは必要なれども利他は毫も必要がない若しあつたならば却て害になる程のとである、それゆへ利他が有機體の本性に具存して居るものであると考へるのは實に道理のないとである。

單細胞的有機體(第一段階)は互に生理的利己のみを具有して居るが、これが相集合して一の複細胞的有機體(第二段階)即ち動植物を組成して互に共同生存をするやうになると其相互間に始めて生理的利他が出来ると此複細胞的有機體即ち動植物も互に生理的利己のみを具有して居るけれども、これが相集合し一の複細胞的有機體(第三段階)を組成して互に共同生存をするやうになると其相互間に或は重もに生理的或は重もに心理的利他が出来ると

のである、それゆへ上段階の有機體も下段階の有機體も孤立生存をして居るものの相互間には全く固有の利己のみがあるけれども共同生存になると必ず多少利他が生じて來るのである、それは全く必要といふ理由から生じて來るのであるから即ち全く因果的のとである利他の生ずる所以は實に此必要といふ理由の外には決してないのであるから利他も亦有有機體固有のもので利己と並存獨立したものであると歎又は利己は賤むべきもので利他は貴ぶべきものであると歎いふ議論の謬つて居るとは最早疑ふべき餘地はないのである。

然るに不思議などには余が最も信賴する所の碩學ヘッケル氏の利他に就ての議論が少く曖昧に思はれるのであるが其事に就て一寸ここに述べやうと思ふ、同氏が既に單細胞體相互間に道徳が始めて起つたと云ふとを論じたのとは前に述べた通りであ

つて是れは余の最も賛同する所であるが併し余は徹頭徹尾此所謂道徳即ち利他を全く利己の變性と認めたと上での賛同であるけれどもヘッケル氏の説では矢張利他を利己と共に獨立固有と認めて居るやうにも疑はれるがそれは決して賛同の出來ぬとである其證據を擧げて見れば。

同氏は其著 *Weltrhythmus* (第二五八頁) に希臘の古哲エムペドクレス氏 (*Empedokles*) が物質に對抗力即ち相憎力 (*Die repulsive oder hassende Kraft*) と吸引力即ち相愛力 (*Die attraktive oder liebende Kraft*) との二力があると説ける主義并に又ゲーテ氏 (*Goethe*) が化學的撰擇親和力 (*Die chemische Wahlverwandtschaft*) と男女相愛とが一原理に出る所以を説いた主義を引證して男女間の利他即ち相愛も畢竟化學的撰擇親和の進化であると述べて居る又同書の第四零四頁には吾吾人間は社會的脊椎動物であるから二種の本務即ち利己と利他とを

持て居ると述べて居る。

「けれども又同書の第四零八頁には基督教は利己を全然擯斥するけれども此利己は吾人の自己保護のために絶對的に必要なるのみならず利他は皮相上利己と正反對の如く見えるけれども其實は高尚優大なる性質を得た利己である吾人が偉大なる事業のために己れを全く犠牲として盡すのは實に高尚優大なる利己がなければ出來るとでない但し妄に利己を擅にして他を害するものが悪事であるのは勿論であると述べて居る。

「ヘッケル氏の利己利他の説は先づ右様などであるがエムペドクレス氏の物質に對抗力即ち相憎力と吸引力即ち相愛力との二力があると云ふ説を引證したのは確かに利己利他が本來獨立並存して居ると云ふとを證明するためであらうが併し余の考ふる所では物質が固有して居る力は本來對抗力のみであるけれども

若しも互に集合するとが互の利益となるやうなときになると本来の對抗力が始めて其性を變じて吸引力になるのではあるまい乎と思ふ。是等のは物理学や化学の知識に乏しい余の知る所ではないけれども、まづ左様に想像するのであるが、若しも此想像が當るとすれば、矢張利己から必要に依て利他が起ると云ふ道理になるのである。

又ギエーテ氏の男女間の相愛が畢竟化学的撰擇親和力の進化であるといふ説を引證したのも、矢張利己利他の獨立並存を證明したのに外ならぬけれども、併し余の考では男女の相愛といふものは、まだ利他与云ふ部類には屬せぬもので、尙純乎的利己であると思ふ。是れは一寸利他のやうに見えるけれども、他の利他とは違ひ、全く男女の兩性慾に出るものであるから、尙利己其儘の性質を暴露して居ると思ふ。それゆへ余は此證明にも服するとは出来ぬ。

のであるが、併し開明人民の男女間の相愛に至ては既に大に利己其儘の性質を脱して利他となつて居るけれども、未開人民や動物の男女牝牡間の相愛は明かに利己其儘の性質を暴露して居るから、まだ變性的利己と云ふとも出来ぬ。矢張純乎的利己の部類に入れる方が當然と思はれるのである。

ヘッケル氏はエムペドクレス氏やギエーテ氏の説を引證して利己利他の獨立並存説を主張するにも拘はらず、又前文の如く、利他は皮相上利己と正反對の如く見えるけれども、其實は高尚優大なる性質を得た利己である。吾人が偉大なる事業のために己れを全く犠牲として盡すのは、實に高尚優大なる利己がなければ出来るとでない」と述べた所は、全く余の説と同く、利他を以て利己の變性とした趣意になるのである。箇様な譯でヘッケル氏の説は自家撞着のやうに思はれる點があつて、甚だ曖昧に感じられるのであ

る。
けれども獨りヘッケル氏のみならず又余が最も尊信する不世出の碩學ダーキン氏さへも右同様の迷見に陥つたやうに思はれる。ここに其大意を述べて見れば利己心が道徳行爲の起因であると云ふ説もあり又最大幸福が道徳の原理であると云ふ説もあるけれども余(ダーキン氏)の考では絶て快不快の念には關係せず全く本能又は習慣より發する道徳行爲もあるやうに思はれる例へば俄に他人の家に火災の起つた際に何の思慮を用ふる暇もなく其家に馳せつけて危急を救護するやうなる行爲の如きは決して其事が快感を生ずると云ふやうな考のあつてするとはな^い全く快不快杯の考に依らずして起る行爲であるが然らば何故に此の如き行爲が起る乎と云へば是れは全く吾吾の腦底に深く根ざして居る所の社會的本能(Soziale Instinkt)の働であるに相違ないと思ふと是れがダーキン氏の説である(其著 Die Abstammung der Menschen. Victor Carnus 獨譯第一册第一五五頁)

併し是れは甚だ間違つたと思ふ尤もダーキン氏が右の如き行爲を以て吾吾の腦底に深く根ざして居る所の社會的本能の働であると言つたのは其通りに相違ないけれども社會的本能なるものは全く根本的本能ではない本能には二種があつて原始的のもの⁽¹⁾と第二次的のもの⁽²⁾がある(1)が社會的本能は第二次的に屬するものであつて此第二次的の前に原始的のものがある此原始的のもの⁽³⁾と云ふのは余の考では即ち唯一利己的動向であると思ふ前に述べた如く共同生存即ち社會的生存の起るのも全く此利己的動向から利他的動向が生じて起るのである而して社會的本能なるものは社會的生存が起つて其習慣が長い期間に積重し又遺傳して後に生ずるものであると云ふとを知らぬければならぬ。

(1) 余は道徳法律進化の理(第三版第五三頁に原始的本能と第二次的本能との別に就て論じておいたから其文を轉載するであらう。

〔本能に原始的及び第二次的本能(Primären und sekundären Instinkte)の二種あり原始的本能は有機個體が本來固有するものにして彼の生理利己的及び心理利己的根本動向より直に生ずるものなり例へば營養を取る本能及び自己の種の増殖を營む本能其他總て經驗に依らずして自己の利を取り害を避くべき固有の能力是れなり而して此原始的本能は下等動物にありては全く無意識的に發動すと雖高等動物に至ては多くは意識的に發動するととなれり然るに第二次的本能にありては右に反し最初知識に依て獲得したる能力が數子孫に於ける遺傳及び應化に依て後には却て無意識的に發動するととなれり例へば蜂の巢を造り蜘蛛の網を張る本能の如き是れなり又高等動物及び人の社會的本能と稱するものの如きも同く之に屬するものと知るべし。〕

簡様な譯であるから其順序が先づ左の如くなるのである第一

が唯一の利己的根本動向是れが即ち原始的本能といふものである。それから第二が共同的即ち社會的生存、それから第三が社會的本能であるが是れが即ち第二次的の本能になる。それゆへ利己的動向は原始的本能であり社會的本能は第二次的の本能である。云ふ相違がある。して見れば社會的本能は後に生じたもので此社會的本能よりも尙早く腦の奥底に利己的動向と云ふ原始的本能が存して居るのであるといふと知らぬければならぬ。前述火災救護の如きは直接には社會的本能から出るに相違ないけれども更に間接の大本源に溯て考て見ると他人の危急を他人の危急として看過するものが出來ずして全く自己の危急であるやうに感ずるところから起る譯になるのであるから畢竟ずる所矢張利己的根本動向から起るのであると認めぬければならぬのである。是れがダーキンの説の大に謬て居る所以である。

終りに臨み尙一言せぬければならぬとがある、それは外ではない前記したる男女牝牡の相愛のとであるが世の學者は男女牝牡の相愛を最も初めに起つた利他で且つ最も大なる利他であるやうに考て居るのであるけれども余は決して左様に考へぬ既に述べた如く此相愛はまだ十分利他となつたものでない却て殆ど純平的利己であると思ふ尙十分純平的利己の性質を暴露して居るものと思ふ純平的利己が兩兩相合すれば通常の場合では互に抵抗するのであるのに男女牝牡相愛の場合には互に抵抗せぬのみならず却て親和するからそれが利他のやうに見えるのであるけれども其親和は唯互に自己の生殖慾を充たさんがための必要から生ずるとであるから其實は對手の利益のためにするといふ點は尙甚だ微小であつて殆ど全く自己自身のためにするのである全然純平的利己であるとは言はれまいけれども殆ど純平的利己

であるとは言ひ得られるものであらうと思ふ尤も前述の如く開明人民になると既に大に利他の性質を帯ぶるものになつて來るに相違ないけれども動物界から野蠻人民界にかけては右の通りであると思ふ、それゆへ余は此相愛を最も初に起つた全き利他とは決して認めない最も初めに起つた全き利他(心理的)は唯母の子に於ける愛であらうと思ふ。

利己利他の事に就ては尙詳論せぬければ十分ではないけれども此事は本講演の主旨でないから先づ是れだけで差置くとしやう尤も本論に至て尙論ずるであらう。

進化の理に依て研究せぬ學者が吾吾人間を動物以外の特造物と認めて動物には利己的根本動向が唯一であるけれども人間には本來利己の外に尙利他が賦與されてあるとする(1)のが即ち二元主義になるのであるが又利己利他の二心を本來全く獨立並存

と見る主義も二元主義と言つてよろしいのである。

1) 今日の間は利他心を祖先から遺傳して居るから是れは先天的に利他心を有して居ると言つてよろしいけれどもそれは人間に本來利他心が賦與されてあると云ふのとは違ふから此道理を間違へてはならぬ。

第六章 結論

以上述べた所で余が執る所の主義を粗明かにした考であるが其主義に據れば此宇宙間には一の神秘もない一の不思議もない一の絶対意思もない一の目的もない一の超自然法もない唯あるものは一定不動の自然法即ち因果法のみであると云ふとに歸するのである。但し吾吾の知識で分らぬとは確かにあるのみならずそれが随分多いけれどもそれを神秘とも不思議とも云ふとは出来ぬ。從來不思議神秘として居た事の中にも前世紀の學問の進歩

で十分分るやうになつたともある。尙此後わかるともあるであらう併し假令到底人智の及びさうもない事にしてもそれが直に不思議である神秘であると云ふとはならぬ。唯人智の及びぬまでのとである。ギエーテ氏が「吾吾は一に萬古不易の金剛大法(Das ewige, ehene, grosse Gesetz) 即ち自然法因果法となり」に支配されて吾の生存境界を成就するとに餘儀なくされて居ると詠じた如く吾吾人間も他の萬物と全く此金剛大法の奴隸となつて少しの自由意思も許されてないのである。他の萬物が微塵程の自由意思も有せぬ如く吾吾も亦微塵程の自由意思も有せぬのである。又吾吾人間にも他動物にも利己的根本動向を與へられてあるのは甚だ幸であるのであるけれども外に利他的根本動向が與へられてないから共同生存を成して居らぬ間柄には甚だ悲惨なる現象が起るが唯纔に共同生存の出来るために利己から利他が生じて

始めて互に幸福を得られるやうになるのである。

金剛大法なる大奴隸主は右の如く一の仁心もなければ又一の慈悲もない實に無情極まるものであると云ふとを知らぬければならぬ。然るに古來の宗教家又は哲學者は此無情極まる奴隸主を誤て仁心深き者と考へたり。或は他の萬物には無情であつても獨り吾吾人間のみには頗る仁慈を垂れるものである。杯考へて神と歎造物主と歎絶對と歎實在と歎名を付けて信仰するのである。が是れが大なる迷謬である。尤も絶對と歎實在と歎何と歎言ふと神だの造物主だのとは違ひ人格的でなくて如何にも學者の言ふとらしく聞えるけれども併し學者は此絶對にも實在にも矢張神や造物主のやうに正善なる一大意思のあるものの如く考へて居るのであるから畢竟人格的の神と同じやうなものになつてしまふのである。然るに幸にも近世進化學なるものが始めて開けて此

新學理が漸く萬古の迷謬を一掃して金剛大法を吾人に紹介せんとして居るのであるが是れは實に吾人の歡ぶべき現象であると思ふ。

此金剛大法が右の如く無情無慈悲なる奴隸主であるとするれば吾吾は誠に憫れなる不幸者であるやうに思はれるけれども決して左様でない。此大法の支配があればこそ萬物の進化といふものがあるのであつて萬物の進歩發展が出来るのである。而して其理由は後に追論する所で明かになるであらうと思ふ。然るに吾吾が若しも神と歎造物主と歎其他種種に唱へるやうな仁心の深厚なる支配者の下にあつたならば到底進化といふものあるべき筈がないから吾吾は却て甚だ不幸なるものとなるのである。吾吾は無情無慈悲なる金剛大法の支配下にあるとを甚だ歡ばぬればならぬ。

第一講 自然界(有機界)に於ける三大矛盾

諸君！ 余はここに自然界に於ける三大矛盾と題したけれども其實は特に有機界のみに就て論ずるのであると云ふとを先づ以て斷つておかぬければならぬ余の考へた所では有機界には三種の大なる矛盾が存して居るやうに思はれる小なる矛盾は尙澤山ある乎も知らぬが兎に角大なるものが三種あると思ふ但し是れは全く矛盾と認むべきものでない乎も知れぬけれども吾吾人間から考て見れば決して矛盾でないとは言へぬやうに思ふのである此事に就ては既に「道德法律進化の理」(第三版)に一寸論じてお

いたのであるが、ここには委しく述べやうと考へる、そこで先づ三
大矛盾の目を擧げて見れば、

第一 時時刻刻生誕する有機體の員數と其生存需要物の員
數とに於ける矛盾。

第二 動物の生存と其食餌とに於ける矛盾。

第三 有機體の根本動向と其身心力とに於ける矛盾
であるが先づ、

第一章 時時刻刻生誕する有機體の員數と其生

存需要物の員數とに於ける矛盾

と云ふとに就て述べやうと思ふ、凡そ此地球に時時刻刻生誕す
る有機體の員數と云ふものは實に非常に大なるものである、肉眼
では見えぬけれども此一室内の空氣中にも無數の小有機體即ち

所謂菌 (Bakterie) が浮遊して居るのである、ここに一寸菌に就て一
例を擧げて見やうならば凡そ菌なるものは多くは肉眼では見え
ぬ程の小なるものであつて其種類が夥しいとであるが其生誕は
分裂生殖と云つて一個の體が段段に分裂して増殖するのであつ
て決して雌雄兩性の交接に依て生誕するのではない、それゆへ是
れは無兩性的生殖と云ふのである、其分裂の時間には種種の相違
があつて毎二三十分乃至一時間位に一回宛分裂するのである。

今每一時間に一回分裂する菌に就て計算して見ると一個の菌
が一時間立てば二個となる、此二個が又一時間立てば四個となる、
此四個が又一時間立てば八個となると云ふやうに幾何級數で増
殖するのであるから七十二時間即ち三日の後には其員數が遂に
四十七兆 (即ち四十七 Trillionen) となり又百二十時間即ち五日の後
には非常に増加して九百二十八立方海里 (一立方海里は我が約四

千九百立方町もある海洋に充滿する程になる計算であると云ふが是れが僅か五日前には肉眼で見えぬ唯一個の菌のみであつたのである又動物にしても最初牝牡一對のものが僅か數年間に五大洋を十分充たした上に尙全陸地をも家の高さ迄に充たす程に繁殖する計算であるとのとである是れは決して想像説ではない専門學者の計算に出たとである。(Bichner著 Kraft und Stoff 第十四版第一四三頁)

然るに不思議などには實際には決して左様な現象がない地質學に於て化石を發見した以來の時代を三大時代として第一紀第二紀第三紀 (Primäre, Sekundäre, und tertiäre) に分け其全年數を約四千萬年として居るのであるが此驚くべき年間に一度も右述べたやうな増殖がないと云ふのは抑如何なる理由があつてのとである乎尤も生誕の裏面には又死亡があるから生誕するだけ増殖

すると云ふ道理はないけれども死亡の數を頗る多數と假算して見ても尙夥しい増殖にならぬければならぬのであるが左様な増殖は決して實際にはないのである、して見れば右學者の計算が大に謬て居るやうにも考へられるが併し決して謬て居るのではない然らば何故に事實と計算とが全く合一せぬのである乎これが直に起らぬければならぬ一大疑問である。

然るに此一大疑問の直に解決され得べき道理が確かに存して居るのである然らば其道理とは如何と云ふに外ではない有機體の増殖を妨害する一の大原因があるのである凡そ有機體が生存するには必ずそれが爲めに缺くべからざる需要物が澤山あるのであるに其需要物が此地球に不足して居る是れが即ち有機體の増殖を妨害する一大原因となるのである凡そ有機體が生存のためにする需要物と云へば種種あるなれども先づ其重なるもの

を擧ぐれば光、熱、空氣、土地、水の類を始め動物に就ては直接に食餌となるものが甚だ必要であるが併し特に吾吾人間には是等自然的需要の外に尙衣住并に其他種種の經濟的需要と并に心神上の種種の需要もあるなれども、ここでは唯右の自然的需要のみに就て言ふのである然るに此自然的需要物が日日生誕繁殖する所の有機體を養ふには非常に不足である有機體と其生存の需要物との員數の比例が非常に違ふのであるから到底有機體の億分一兆分一をも生育させるとが出来ぬのである。

光や熱は太陽から發するのであるから決して不足はないやうに思はれるけれども地球の廣さに限りがあるから地球が受ける光や熱にも限りがあることになる又空氣や水は狭い地球にあるものゆへ無數に生誕する有機體の爲めには固より缺乏を告げるとなる道理である又土地と云へば即ち地球の海陸を指すとであ

るが是れも無論不足を告げるとになるのである隨て又動物が海陸から資取する食餌と云ふものの大不足を告げると云ふとも無論である、であるから時時刻刻生誕繁殖する有機體が悉く生存してゆくと云ふとは到底出来ぬ幸に生長し得るものは僅に億分一兆分一にも足らないで其餘は悉く死滅してしまはぬければならぬのである前述學者の計算と實際の状況との反對は全く右の理由からである支那では天地好生之徳と歎又は天地之生生と歎言つて頗る樂觀的に考へて居るけれども事實は全く反對で天地好死之徳と歎又は天地之死死と歎言ふ方が當然であると思ふ、して見れば是れは實に自然界に於ける一大矛盾と認めぬければならぬとであると思ふ自然は有機體に生命を與へながら其生命を保全すべき手段に甚だ吝なるのである實に容易ならぬ大矛盾と云はぬければならぬ。

右の一大矛盾は自然界一般に就てのとてであるが特に吾吾人間
のみに就て考て見ても右の道理は十分わかるのである吾吾人間の
繁殖に就ては人種や民族や又は開否の相違等に依て非常なる
相違がある非常に繁殖する處もあれば又それと反對に追追人口
の減ずる處もあるそれゆへ何れの國でも同じやうに繁殖すると
は云はれぬけれども併し一般に見渡した所では繁殖力は随分強
いと言つてよろしいと思ふ殊に開化が上進して國の經濟が發達
して來れば繁殖力は益盛になる道理である上に又醫學や衛生術
が追追進歩すれば猶更のとてである。

箇様に漸漸繁殖するものとして見ると結局どうなるかとてあら
う乎其食料とすべきものの到底大缺乏を告げるのは勿論のとて
實に心細いとてであるそれゆへ經濟學者杯は從來其策に就て種種
に苦辛して居るのであるが殊に英國の經濟學者マルサス氏 (Malthus)

(thus) は前前世紀の末に *Essay on the principles of population* と題する論
文に人口の繁殖と食料の増殖とに於ける大相違を論じて居るが
其説に據ると人口は一二四八と云ふやうに幾何級數で増加する
のに其食料となるものはそれに反して一二三四と云ふやうに算
術級數で増加するゆへ後には到底大不權衡を生ずるやうになつ
て如何とも致し方のなくなる所以の理を論じて併せて其豫防策
をも説て居るのである尤も此議論は全く正當ではないと云ふと
もわかつたのであるけれども併し兎に角追追と人口と食料の不
權衡を生ずると云ふとは事實に相違ないのである。

又ラーフェンスタイン氏 (Ravenstein) といふ地理學者が西曆一千
八百九十年に英國に於ける地理學會に提出した調査書に據ると
全地球の人口は十四億六千七百五十萬であるが大約十年毎に其
百分八を増加するものと見て百八十二年の後即ち西曆二千零七

十二年と云ふ年になると全地球の人口が五十九億九千四百萬に増加するとになる然るに眼を轉じて全地球の耕作牧畜に適すべき土地の面積は如何と云ふに纔に四千二百三十七萬英方に過ぎずして其他は皆礫确沙漠等であるから耕作牧畜に充つべき地の増加は思ひもよらぬとて今日以後際限なく増加すべき人口を養ふとは到底不可能であると云ふやうに論じて居る尤も余は其調査書を直接讀んだのではない唯雜誌で大意を讀んだばかりであるが大意は其通りであつたラーフェンスタイン氏の計算が或は謬て居る乎どうかは保證は出來ないけれども大體に於て間違はなからうと思ふ其外學者の議論も種種あるであらうけれども余は委しく知らぬが併し人口の繁殖と食料の増殖との間には次第次第に不權衡が増して來るには相違なからうと思はれる。

併し又一の注意せぬければならぬとがある其事に就ては理學

博士渡瀬庄三郎氏が箇様に言つて居る「マルサス氏が人口原論を公にしてから今は百餘年を経て居る其間理學は著しく發達し其應用に依て人間の食物の産額は非常に増した將さに人工を以て食物を造らうとして居るのである實に過去百年間世界の人工は五割を増して開明國には特に甚だしいが労働者の生計は却て百年前よりはゆたかになつたこれは全く理學進歩の賜で人生に必要な物資の生産も豊富になりこれを運輸するにも大に自在になつたから文明國では生計の困難は必ずしも人口の増殖に伴はぬのである云云」ダーキン氏著書の譯種の起原中「ダーキンの一生及び其事業」第五九頁是れは尤な説であるけれども永世其通りである乎如何は不安心のとである併し食料は先づそれとしても其次に困るのは住地である住地は食料と違ひ理學の應用に依て増加する譯にはゆくまいと思ふ尤も今日にあつては全地球中尙開拓

に適する土地も少からぬとてあらうけれども併し將來人口が幾ら増すも困難を感じぬと云ふ譯にはゆくまい但し今日の礫砂漠杯も將來理學の進歩で耕作牧畜に適するやうにするとが出来る歟も知れぬけれどもそれとても限りのあるとてあるから到底十分の望はなからうと思ふ。

是れは特に人間界に就て論じたとて純粹なる自然界の論ではないが併し有機體の増加の員數と其生存需要の増加の員數とが次第次第に不權衡になると云ふ理由は是れて益明かになると思ふ是れは實に自然界に於ける矛盾の最も大なるものであるに相違ないと信ずる唯此矛盾の道理から考て見ても彼の目的的宇宙觀の大謬見であると云ふとは明かなとてあると言はぬければならぬ次には。

第二章 動物の生存と其食餌とに於ける矛盾

と云ふとに移るであらうが自然が動物を生誕繁殖させるに就ては特に其食餌となるべきものを與へぬければならぬ筈のやうに思はれるなれども決して左様な物を與へてないから、そこで動物は必ず同一類たる有機體を食餌とせぬければならぬ即ち自己の近同類たる他の動物又は遠同類たる植物を食餌とせぬければ決して生存するとの出来ぬやうになつて居るのである併し動物にしても植物にしても苟くも自然が其生命を與へた以上は決して同類の食餌となれと云ふ譯ではなからうと思はれるではない乎、して見れば自然は動物植物に就て全く一視同仁でなければならぬやうに思はれるのであるに決して左様でないと思ふと云ふとがわかる動物が若しも無機體を食餌として生存の出来るやうになつ

て居るならば道理のあるやうに思はれるなれども必ず近同類遠同類を食餌とせぬければ生存の出来ぬやうになつて居ると云ふのは如何にも不道理のやうに思はれる目的主義者は此自然法を何と考へるであらう乎此事に就ての説を聴きたいと思ふ自然界が目的法で支配されるものならば決して箇様な不道理不仁慈なとのあるべき筈はなからうと思ふ吾吾人間の心ではどうしても左様に考へるより外に致し方はないのである。

佛教では殺生と云ふとを人間が動物を殺す意味のみに用ひて居るなれども殺生は決してそればかりでない動物が人間又は他の動物を殺すのも人間又は他の動物が植物の生命を奪ふのも矢張殺生に相違ないのである動物の中でも動物食即ち肉食のみで生存するものと植物食即ち菜食のみで生存するものと又肉菜兼食で生存するものとの三類があるけれども是れは皆必ず近同類

若くは遠同類たる動物植物を食餌とせぬければ決して生存してゆくとの出来ぬやうになつて居るのである自然法が全く左様になつて居るのであるのみならず動物にも植物にも寄生體と云ふ一種の有機體があつて是れは唯他の有機體に寄生して其生存需要となるものを己れに横取りしてのみ生存して居るのである所謂居候の最も風の悪いものである。

更に奇と云ふべきは植物の中にも動物を食餌として生存して居るものさへあるのである例へば茅膏菜(Drosera rotundifolia)蠅地獄(Dionaea muscipula)猪籠草(Nepenthes)等其他數種の如きものが皆それであるが是等の植物は肉食植物若くは昆蟲食植物(Die fleisch- oder insektfressende Pflanzen)と稱するものであつて是等の植物に動物性蛋白質を與へると能く消化するとが出来ると云ふ但し是等の植物も普通植物と同様固より葉緑素(Chlorophyll)を持つて居て無機物質

から有機物質を体内に形成する機能があるから別に肉食させずとも急に枯死するやうなことはないけれども併し肉食させれば大に營養になると云ふとである其他又植物に動物性の肥料の必要であるといふとは古來世人の能く知て居るとである之を要するに動物が必ず近同類若くは遠同類を營養物とせぬければ決して生存するとの出來ぬのみならず植物中にさへも無機體を生存需要とする外に尙有機體の營養を必要とするものがあるといふとを知らぬければならぬ。

有機體が左様に同類相食むと云ふやうなとをせぬければ決して生存の出來ないと云ふのは是れは如何に考へても自然界に於ける一大矛盾と云はぬければならぬと思ふ動物でも多くの植物と同様に全く無機體のみを生存需要として立派に生存するとの出來るやうに造てあつてこそ矛盾がないと云ひ得られるなれど

も右の如きとてあつては吾吾人間の考では如何にしても矛盾とするより外に致し方はないと思ふ併し近世物理學化學の大進歩に依て既に七十年前に人工で有機物質を造るとが發明されたので爾來人工的有機性食品を造らんと種種に研究して居る學者もあるとのとてあれば將來人間界に於ては同類たる動物を殺して食料とするを廢する時機が來る歟も知らぬ併しまだ容易なとてはなからば次は。

第三章 有機體の根本動向と其身心力とに於ける矛盾

の順序であるが有機體の根本動向に就ては緒論に於て比較的委しく述べたから諸君にも大抵了解されたであらうと思ふ有機體には凡て箇様な結構な動向がある即ち専ら自己自身の利益と

なると換言すれば自己自身の身心の維持と發展とを遂げんとする方に進む唯一の動向といふものが具つて居るのである凡そ有機體として此動向のないものは一もない植物ならば成るべく日光を受け水分を引き又種種の他の妨害を避けて生長しやうと云ふ方に進む動向であるが是れは重もに身的即ち物質的の動向である然るに動物となると右様なる物質的動向の外に尙心神的動向があつて凡そ自己自身に利益を取らうと云ふ方に進むのであるけれども物質的動向の方は所謂生理的では是れは無意識であるから自己自身に少しも意識せぬ少しも分らぬのであるが心神的即ち心理的動向になると無意識的のものと意識的のものとの二種類がある自己自身に少しも氣附かぬものもあるけれども又明かに氣附て居るものもあるのである。

此唯一の根本動向といふものが凡ての有機體に具つて居るの

は全く自然が有機體に對する一視同仁と見てもよいのであるが然るに或る他の事情があるために凡ての有機體が此動向を同じやうに利用してゆくとが出来ぬのである或る有機體は大に此動向を利用するとが出来ぬけれども又或る他の有機體は決して十分に此動向を利用するとが出来ぬと云ふやうな相違がある凡ての有機體が折角同一なる利己的動向を固有して居ても其利用に至て難易の相違があるやうでは自然が有機體に對する一視同仁も全く貫徹しないやうな結果となるのである。

箇様なる結果になるといふのは如何なる理由からである乎といふに全く有機體の遺傳に種種の相違があるのと又有機體が生誕以來遭遇する外界の種種の状況に應化する上にも種種の相違が生ずるのに依るのである遺傳と應化とに依て有機體に種 (Species) が分れた種が分れて來るとそれと同時に其身心の力に強弱

優劣の相違が生じて来た又假令同一種中であつても個體に強弱優劣の相違が生じた右様の譯で色色の種も出来て来たし又假令同じ種の中でも色色の相違が出来たところから同じ有機體であつても其利己的根本動向を同じやうに利用するとが出来ぬ優強なる種又は優強なる個體は此根本動向を大に利用することが出来るけれども劣弱なる種又は劣弱なる個體はそれを大に利用するが出来ないのである是れが即ち根本動向と身心力とに於ける矛盾といふものであるが目的論者は之を何と考へるであらう乎若し自然が凡ての有機體を目的的に造つたのであるならば其身心力を一視同仁的に同一様の程度で與へぬければならぬではいふそれでは折角の目的も何の効能もなさぬことになるのである是亦目的的宇宙觀の大謬見たる所以を證明するものであらうと思ふ。

第二講 有機界に於ける生存競争自然淘汰及び進化

第一章 三大矛盾と生存競争

諸君若しも有機界に以上述べたる所の三大矛盾がなかつたならば有機界は全く天國とも極樂とも云はれるやうな圓滿無量なる世界であらう各有機體は絶對的安樂なる生存を遂げるとが出来るのであらうが惜い哉三大矛盾なるものがあるために有機界は遂に修羅の巷となり地獄となり了はつたのである詳述すれば若しも此地球上に時時刻刻生誕する有機體の員數と其生存需要物との員數が能く權衡を得て居たならば又動物が己れの近同類遠同類たる動物植物を食餌とする必要がなくして他に特種の食

餌となるものがあつたならば井に唯一の利己的根本動向を固有する凡ての有機體の身心力に強弱優劣の相違がなかつたならば世界は泰平無事の樂土であらう絶對幸福の淨土であらうが然るに右の三大矛盾のあるがために遂に修羅の巷となり地獄となり了るのである。

併し吾吾は泰平無事の樂土を欲するであらう乎但しは修羅の巷や地獄を望むであらう乎釋迦や基督は甲の場合を欲するであらうが吾吾は全く乙の場合を望むのである何となれば吾吾が最も望む所の進化なるものは**此**特ば乙の場合に起る現象であるからである而して其進化なるものは必ず生存競争と自然淘汰(Darwinismus Dasein und die natürliche Zuchtwahl)即ち修羅の巷の結果であるが此生存競争自然淘汰といふものは又如何なる譯から起る乎と云ふに是れは全く有機體の利己的根本動向が其原因となるので

あるが併し決して此原因のみで起るのではない尙他に一の誘因即ち縁となるものがあつて、それで始めて起るのである其縁とは何乎と云ふに是れが即ち有機界に於ける三大矛盾なのである即ち利己的根本動向は因であり三大矛盾は縁である全く此因と縁とで生存競争が起り此生存競争の結果が自然淘汰となつて、それで進化といふものが出来るのである今之を圖式にして見ると箇様になるのである。



吾吾は畢竟進化と云ふものを望むから餘儀なく三大矛盾と修羅の巷とを歡ぶのである。三大矛盾と修羅の巷といふものがなければ到底進化といふものは望まれないからである。諸君は果して之に賛同されるであろう乎如何併し假令諸君が吾吾の意見に賛同されないとした所で到底進化を如何ともするとは出来ない。釋迦や基督が只管慈悲忍辱を勧めたり又一頰を打つ者があらば更に他頰を打たしめよと教へたからとて三四千年間殆ど其結果は顯はれないのであるのみならず釋迦基督さへも其實修羅の巷に馳驅したのである。彼等が他教を排して自教を擴めんとしたのは全く修羅道をやつたのに外ならぬ實に自家撞着と云はぬければならぬ。有機界に唯一利己的動向と三大矛盾とのある以上は生存競争は到底免れぬとは出来ぬのである。

併し余が斯く言ふと必ず反對論が出るに相違ない否余は常に

反對論に出遇つて居る。それは箇様な反對論である。生存競争とても悉く悪いとは言はないが唯妄に他の利益を害するやうな生存競争が悪いのである。是れが即ち一種の反對論である。併し善悪だの正邪だのと云ふとは既に前に述べておいた如く唯共同的生存上に存するとして孤立生存をなして居るものの相互間には善悪正邪の沙汰はない。又共同生存上でも進化の次第程度に依て善悪正邪は變ずるもので全く一定不動のものでないから唯一涯に他の利益を害するやうな競争が悪いとも言はれぬ。但し善悪正邪の一定不動でなくして變化のあるとに就ては後に追論する所てわかるであらうから今ここでは述べぬ。併し其當時に於て實に悪いと認められた競争でもそれが後世のために甚だ必要であつた大に後世の開化を促したと云ふやうなとも歴史上隨分あるとてあるから旁以て箇様な競争は無條件に悪い箇様な競争は無條

件に善い杯と云ふとは容易に言へぬとである。

のみならず、箇様な反對論は全く贅言である。有機體の最高進化で生じた人間であるからこそ、箇様な反對論をするのであるけれども、若しも有機界に會て全く進化がなかつたものと考て見たならば、今日人間といふものは決して出來て居ない。獨り人間のみならず、全くの原始有機體の外は、宇宙にないのである。否、恐らくは原始有機體もないのであらう。して見れば、進化が悪いとか、若くは他の利益を害するやうな生存競争が悪いと歎言ふ人も、矢張競争と進化との御蔭で、此地球上に出て來た人である。競争と進化とが會てなかつたならば、今日の反對論者も、此世に出て來て居るのではない。自身が競争と進化との御蔭で、此世に出て來て居りながら、それに反對したとて、何の効能があらう。實にわからぬ話である。

右様な愚論を吐く人は、三大矛盾に就ても頗る驚くであらう。箇

様な人は、神と歎天と歎上帝と歎造物主と歎若くは絶對と歎實在と歎云ふやうなものは、全智全能で又最も仁慈の圓滿なるものであると考へて居るのであるから、三大矛盾に氣が附いて見たならば、驚かすには居られまい。併し是れは争ふべからざる事實であるから、致し方がない。箇様な人が、造化は一視同仁であると歎公平無私であると歎考へて居るのが、本來間違つたとである。全く目的主義の謬見に陥つて居るのである。仁不仁と歎公平不公平と歎云ふとは、造化上に關係は少しもない。生存競争に勝つたものから見れば、造化は仁であるけれども、負けた方から見れば、不仁である。今日の幸福多き開けた世からは、造化は頗る仁心のあるやうに思はれるけれども、幸福の甚だ少かつた開けぬ古代には、頗る不仁のやうに考へられたであらう。未進化の古代に生れた人の骨折は、今日吾の幸福の原因となつて居るのであるから、乃ち古代の人は今日

の人のために犠牲になつたと言つてもよい又今日の吾吾と後世の人との關係も矢張同様である。

造化に一大意思のあるものと固信して仁慈だの公平だのを造化の至徳の如く考へるのは甚だ間違つたとである是れは道德や善惡正邪といふとを特に共同生存上にのみ存するのであるといふ道理を知らないで天然に存するものであると固信して居るからの迷見である宇宙を目的的に觀察すると箇様などになる宇宙を因果的に觀察すれば決して左様な憂はないのである。

生存競争の大原因となるものは有機體の唯一なる利己的根本動向には違ひないけれども併し其外に三大矛盾といふものがあるが併し如何なる生存競争にも必ず三大矛盾が悉皆縁となるのではない尤も第三矛盾即ち有機體の根本動向と其身心力とに於

ける矛盾だけは凡ての生存競争の縁となるのである凡ての有機體が皆同様に唯一なる利己的根本動向を固有して居るにも拘はらず此動向を活用してゆかうと云ふ身力や心力が有機體に依て相違して居る此力の優強なるものもあれば又劣弱なるものもあるのであるから凡ての競争は必ず此道理から起るのである此道理から起らぬ競争といふものは一もないのである。

けれども第一矛盾即ち時時刻刻生誕する所の有機體の員數と其生存需要物の員數とに於る矛盾并に第二矛盾即ち動物の生存と其食餌とに於ける矛盾此二大矛盾は唯或る種類の競争の縁となるのみで悉皆の競争の縁となるのではない即ち第一矛盾は生存需要を獲得せんが爲めの競争の起る縁となるのみであり又第二矛盾は動物が互に同類を食餌とせんとする競争の縁となるのみである併し此二大矛盾が各單特に其縁となるのではない必ず

それには第三矛盾が添はぬければ競争の起るものでない假令有機體の需要が甚だ不足であつても又動物が動物を食餌とする所謂同類相食むと云ふとが必然のとであつても若しも有機體の身心力に優劣強弱の差等がなくてそれが全く均一であつたならば決して競争の起りやうがない又假令起つたにしても勝敗がつかぬから遂ににらみあひで双方共に餓死してしまふより外に致し方がない。

併し又其裏もある假令優劣強弱の差等があつても若しも生存需要が十分充足して居たならば又は若しも特に動物の食餌に充てられた自然物が十分にあつて決して同類相食むといふが如き必要がなかつたならば隨て競争の起るべき必要も決してないのであるけれどもそれは唯生存需要のための競争と食餌のための競争即ち第一矛盾から起る競争と第二矛盾から起る競争に就て

言ふのみであつて其他百般の生存競争は必ず第三矛盾のみが單特の縁となつて起るのである決して第一第二の矛盾には關係なく第三矛盾のみで起るのであるが併し此類の競争は重もに人間界にあるとて動物界には少ないのである後に述べる所でわかるであらう。

生存競争の直接の結果たる自然淘汰は即ち優強者が勝ち劣弱者が負けるといふとである、それゆへ余は之を簡単に言ひあらはすために優勝劣敗と云ふ名をつけたけれども此優劣強弱といふとをいつも同じやうに解釋し難いともある詳述すれば或る場處や或る時には優強であつても又或る場處や或る時には劣弱となるものもある又それと反對するともある例へば平地では育ち易い植物でもそれを山中に移植すると忽ち枯死するやうなものもある又寒中には生育し難い動物でも暑中には盛に生育するもの

もある又それと反対のものもある人間界でも同じとて例へば古代には僧侶が時を得て居たけれども今日は學者の方が時を得るやうになつたといふやうな譯である其様な次第で其場處其時勢又は其他種種の状況に依て優劣強弱の變ずるといふと換言すれば其境遇に適應するものが優强者であり適應せぬものが劣弱者であるといふとを能く承知せぬければならぬ此道理から考て見るとスペンサー氏が最適者生存 (Das Ueberleben des Passendsten) と名をつけたのが誠に適當して居るやうである。

尙一つ論ずるとがある即ち第三矛盾有機體の根本動向と其身心力とに於ける矛盾の⁽¹⁾とに就て或は反對論が起りはせぬ乎と思ふのであるがそれは如何なる反對論である乎といふに身心力に優劣強弱の相違のあるのが縁となつて生存競争が起るといふけれども其優劣強弱の相違といふものが却て生存競争の結果では

なからう乎、して見れば優劣強弱が生存競争を惹起する原因となるのではなくして却て生存競争が優劣強弱を生ずる原因となるのではない乎との反對説である。

それは一應尤な論である、それも確かに一眞理である、けれども決して左様にばかりは言へぬ地球上に生物の太始祖たる單細胞的有機體が無機體から始めて生じたときに、それが唯一個生じた乎又は數個生じた乎は分らぬけれども若し數個生じたとすれば其個個の間に既に多少の優劣強弱があつたに相違なからうと思ふ併し假令唯一個生じたとしても、それが彼の分裂増殖法で忽ち二個四個八個といふやうに増殖したに相違ない(第一講第一章に述べた通りに)から其個個の相互間には分裂と同時に既に多少の優劣強弱があつたであらうと思はれる凡そ有機體は各遺傳と應化 (Vererbung und Anpassung) とに於て多少の異同があるから凡ての状

況に於て全く同一様のものはない必ず多少の相違がある「似たものはあるが同じものはない」と云ふのが自然法であるとのとであるから其理から考へると個個の單細胞的有機體にも必ず多少の相違があつたに違ひない苟くも多少の相違があれば又必ず多少の優劣強弱の異同があつたに違ひなからうと信ずるとが出来、して見ると此優劣強弱といふものは是れは生存競争から生じた結果とは言へぬ却て此優劣強弱の相違のあるゆへに先づ生存需要を占取せんがための生存競争が起らぬければならぬことになるのであるけれども其後に至ては優劣強弱の相違と生存競争とは互に因ともなり又果ともなつたに違ひない本來優劣強弱のあるがために生存競争が起るばかりでなく又生存競争が起て其自然淘汰として優劣強弱の相違が生ずるやうにもなつたのであるに違ひない。

其上又箇様なども能く承知せぬければならぬ自然界に第一第二の矛盾があるから優劣強弱の間には必ず生存競争が起らぬければならぬことになるけれども併し前述の如く若し優劣強弱がなくて全く同じ力であつたならば假令生存競争が起つても到底勝敗のつく道理がない即ち優劣強弱の相違を惹起する手段が生ぜぬ優劣強弱の相違を惹起する手段が生ぜぬ競争の起らぬのと全く同じとであるして見ると又此道理から考へて見ても優劣強弱の相違から生存競争が必ず起ると云ふとは言へるけれども生存競争から必ず優劣強弱が生ずるとは言へない場合もあるといふとが十分明かになると思ふ。

第二章 無意識的及び意識的生存競争并に生

理的及び心理的生存競争

凡そ生存競争には無意識的競争と意識的競争との別と并に生理的競争と心理的競争との別がある。生理的競争は必ず無意識的競争であるが心理的競争の中には無意識的と意識的との二種がある。植物にあつては固より生理的無意識的であるけれども動物になると生理的無意識的と心理的意識的とがある。尤も心理的は必ず意識的といふ譯ではない。無意識的の分も随分多い。恐らく無意識的の方が意識的の方よりも多いのであらうが併し動物の高等になればなるほど心理的意識的のものが多くなるのである。斯く生理的、心理的又は無意識的意識的と差別はするもの、それが判然と分れるものではない。生理と心理とに判然たる分界もなく又意識と無意識とにも同じく判然たる分界はないのである。

無意識的生理的競争と無意識的、心理的競争と云ふのは一寸一例を出せば直に解かるであらうと思ふ例へば同一地にある甲乙

二株の植物中で甲の方が生育力が強くて乙の方が弱いと甲の方は日光を受けるとも空気を吸ふとも又は地中の水分を取るとも十分に出来るけれども乙の方は凡ての事に於て十分にはゆかぬ。それゆへ甲の方は自然十分の生育を遂げるとが出来れば乙の方はそれに反して十分の生育を遂げるとが出来ずして或は遂に枯死するやうにもなるのである。是れは全く無意識的生理的競争の一例である。

次には無意識的、心理的競争の一例を舉げて見やう。例へば山野に二頭甲乙の獣が居るとして甲は頗る敏捷な性質のものであるが乙はそれに反して甚だ遲鈍なものであると食餌を探しまはるとにしても場處を占めるとにしても甲はいつも利益を得るとが出来けれども乙はいつも不利益を受けるやうなことになるが是れは必ずしも競争するといふやうな考でするのではないけれど

も其結果は競争する考でしたのと同じとなるのである。是れが即ち無意識的心理的競争の一例である。

けれども簡様な無意識的生理的競争でも又無意識的心理的競争でも苟くも競争なるものは凡て利己的根本動向から起るのは勿論のとて其理は意識的競争と少しも相違のないと云ふことを知らぬければならぬ無意識的であると對手を害しやう倒さうと云ふやうな意思は毫もないのである。それは意識的とは全く相違して居るけれども併し自己の利益のためになる方向に進むといふとは確かにあるのであるから必ず利己的根本動向から起るのに相違ないのである。

第三章 生存競争より起る自然淘汰及び身心

の遺傳と應化并にラマーク氏の進化説

苟くも生存競争の起る以上は優劣強弱に依て勝敗が分れる而して勝者はそれに依て利益を得るとが出来るが敗者はそれに依て不利益を受けるとになるから勝者は身體若くは心性又は身體心性共に更に優強を加へて益優強者となるとが出来るが敗者はそれに反して身體若くは心性又は身體心性共に更に劣弱を増すのみならず或は遂に亡滅してしまふやうにもなる而して益優強となつた勝者は其優強なる身體心性を子孫に遺傳するとが出来るに反して益劣弱となつた敗者は其劣弱なる身體心性を是亦子孫に遺傳するやうになるのであるが是れが即ち自然淘汰といふものである。生存競争から自然淘汰の起るといふのは左様なとてある。

のみならず又優強者は四圍の種種の状況に壓迫されてもそれに應じて自己の遺傳性を有利的に變化させてゆくとが出来る。

けれども劣弱者はそれに反して四圍の状況の壓迫に遭遇するときは、それに應じて自己の遺傳性を有利的に變化させてゆくとが出来ないで益劣弱になり易い。是れが即ち遺傳と應化との働で優劣の益分れる所以である。併し一たび良好なる遺傳を受けたものは其應化も必ず良好であり又一たび劣悪なる遺傳を受けたものは其應化も必ず良好でない。と云ふ譯では決してない。劣悪なる遺傳を受けたものでも四圍の状況に遭遇する次第に依て或は良好なる應化をなし得るものもあり又良好なる遺傳を受けたものでも状況遭遇の次第に依て或は劣悪なる應化をなすものもある。から遺傳と應化との關係は甚だ錯雜したものであつて決して容易にわかるものではないのである。

又身體の器官の用不用から遺傳と應化との働に依て自然進化の出來るともある例へば常に四肢を利用して馳驅に慣れて居る

獸だの又は羽翼を巧みに使用する鳥だのは四肢や羽翼の働が段段に進歩して來る。又常に視神經や聽神經を働かす鳥獸は目や耳が益鋭敏になる。而して其長技を子孫に遺傳するから子孫は益進歩すると云ふ譯になる。又それに反して身體の器官を使用するとが少くなると其器官が追追と遲鈍になつて遂には用をなさぬやうになる例へば雞や家鴨のやうな家畜は最早羽翼を澤山に使用する必要がなくなつたから殆ど用をなすとが出来ぬやうになつた子孫の遺傳に依て益左様になるのである。ラマーク氏(Lamarck)の進化主義といふものは此道理に基いたものである。即ち器官の用不用に依り遺傳應化の働で起る進化の主義である。

第四章 ダーキン氏の進化説及び人爲淘汰

右述べたラマーク氏の器官の用不用から進化が出來るといふ

主義も一大發明である古來未曾有の發明であつた併し何分にも、それだけでは、まだ進化の理を盡したとは云へない、そこで其後チャールズ・ダーキン氏は種種に研究を試みたが遂に生存競争自然淘汰と云ふとを發見したのであつて、それに依て進化の原因が始めて十分にわかつた次第である世人が動もすればダーキン氏を以て進化主義の始祖とするのであるけれども、それは間違つて居る進化主義は古くからあるのであるけれども生存競争自然淘汰の主義は全くダーキン氏の發明である其差別を知らぬければならぬ。

ヘッケル氏の説に據れば進化主義の大始祖とも云ふべきは二千年四百年前の希臘の大哲エムペドクレス氏であると説て居る既に緒論の「目的宇宙觀と因果的宇宙觀」の部で述べた如くエムペドクレス氏は動植物の形體は最初目的に造られたのではないけ

れども自然力の相互の抗爭のために變化を受けて遂に目的的なつた(即ち進化)のであると説て居るからである併し、それは太古の話で尙甚だ漠然たるものであるが近世に至てはカント氏ギエーテ氏ラマーク氏杯を進化主義の祖として居るのである併し、れども是等の人人は尙生存競争自然淘汰に依て進化が出来るかと云ふとを發見しなかつたのであるがダーキン氏に至て始めて生存競争自然淘汰が進化の重なる原因であると云ふとを説いたのである始めて此理を説いたのが即ち *On the origin of species* (種の起源) といふ書で是れは同氏が五十歳の時即ち一千八百五十九年に始めて刊行になつたのであるが追追世の尊信を受けるとなつて生物學界に一新紀元を開くものと云はれるとになつた併し今日に至ては嘗に生物學界に於けるのみならず殆ど凡ての科學は勿論尙哲學上に迄大影響を及ぼし大革命を促す程のものとなつた

其外尙 The descent of man (人類の始生)といふ書を著して高等動物から人類の進化した由來を説いたが其外にも餘多の著書があるのである。

ダーキン氏は進化に就ての研究中に偶然にマルサス氏の人口論(前出)を讀んで人口の増殖と食料の増殖との不權衡であるを始めて知つた、そこで箇様な不權衡は決して特に人間の上にものみあるとでなくして凡ての有機界にも同様であると云ふとに氣がついた而して其結果は必ず有機界中に生存競争を惹起さねばならぬ果して生存競争が起れば必ず優強者が勝ち劣弱者が負けるといふ自然淘汰が起らぬければならぬと云ふ道理を發見したのである。て見れば同氏は既に彼の第一矛盾に氣がついて之れを生存競争の起る一大誘因であると認めたのである。尤も同氏はまだ矛盾と云ふやうなと言つては居らぬけれども其矛盾の事實は

確かに認めたのである併し第二第三の矛盾に就ては同氏の考はどうであつた乎一向わからぬ。

生存競争自然淘汰のために最下等有機體から遂に最高等有機體たる吾吾人間に至る迄の進化が出來たのであるが其年數といふものは非常に驚くべきものである地質學で地層から發見する化石に依て證明し得た年數が三大紀に分れて居るが其第一紀(Pri-maire)の年數は晩近の計算に據れば三千四百萬年第二紀(Sekundaire)の年數は一千一百萬年第三紀(Tertiäre)は三百萬年であると云ふとて總計四千八百萬年となるのであるが此年數間に於ける進化の次第を尋ねれば第一紀に始めて魚が出來第二紀に始めて爬蟲類が出來第三紀に始めて哺乳動物が出來たのである。

又ヘッケル氏は自分でモネラ(Monera)と云ふ名をつけた無脊推動物を太始祖として、それから吾吾人間に至る迄を二十五代に分

け文其中で初めの九代を無脊推動物とし後の十六代を脊推動物として分けて進化の理を説て居る(Natürliche Schöpfungsgeschichte 第七一七頁)是れが實に當を得たものである乎どう乎進化學者中には賛否の相違もあるであらうが余輩門外漢には到底わからぬとである。

然るに右自然淘汰といふの外に一種人為淘汰(Künstliche Zuchtzwang)といふものがあるが此人爲淘汰に就て述べて見たならば自然淘汰の理がわかり易からうと思ふから少しくそれを述べるであらう人為淘汰のとは日本でも外國でも古來やつて居るとして決して珍らしいとではないけれども併し人為淘汰杯と云ふ名は曾てなかつたのである例へば植木師が牡丹や菊や朝顔や其他種種の花物を造つたり又錦魚師が錦魚を育てたり或は牧畜者が牛馬杯を仕立てたり杯するに就ては皆人為淘汰の術をやつて居るのである。

である而して此人爲淘汰に依て花物や錦魚や牛馬杯のよろしい種類が追追と出来たのである尙今日も出来つつあるのであつて、それでは等の物が進化するのである。

植木師が從來ある所の牡丹、菊又は朝顔よりは今一層優等のものを仕立てやうと思ふときには唯年年仕來つた栽培の方法ではゆかぬ、そこで更に工夫を凝して今年咲いた花の中で最も優等であつたと思ふ花の種子を撰び取り尋常一樣の花の種子は取除けて其撰び取つた分のみを翌年播種して、そうして十分に良肥料を與へて骨折して仕立てる左様にすると花が去年の分よりは總體に優等のものになる、そこで其翌年もまた同様に花の良否優劣を取捨して良き分の種子のみを播種すると云ふやうに年年歳歳左様にやつて十分心を用ひて培養すると數年數十年を経る間には全く別種の花のやうになつて來る牡丹、菊、朝顔杯に段段珍奇のもの

の出来るといふのは全く左様な培養をやつた結果に外ならぬのである。

牡丹でも菊でも朝顔でも其本を尋ねて見れば全く野生である其野生を古來數十百年乃至數千年心を用ひて栽培した結果が牡丹となり菊となり朝顔となつたのである丁度野蠻人が文明人になつたのと同じとである而して左様に進化したと云ふのは重もには右の如き人爲淘汰に原因して居るのである古來の人は別人爲淘汰杯といふには氣附かなかつたけれども其實全く人爲淘汰をやつて居たのであるがダーキン氏は十分其理を研究して始めて人爲淘汰といふ名を與へたのである。

又錦魚と云ふ實に態態拵へたやうな美しい魚の如きも其元祖を尋ねれば全く一種の鮪である最初其一種の鮪の中で最も光澤ある種類のもののみを撰で其卵を取て種種に心を用ひて育てた

是れは多分好奇心からであつたらうと思ふ而して其育つた中から又最も光澤あるもののみを撰び其卵を取て育てたから前よりは更に光澤の多いものが出来た尙又其次にも同様の仕方育てるといふやうに年年歳歳同じ方法でやつていつたので遂に錦魚といふものが出来たのであるけれども尙其方法を數年數十年數百年とやり通して來たので遂に今日に至ては實に全く美術的に拵へてそれに生命を與へたのではあるまい乎と思はれるやうな美麗なものが出来あがつたのであるのみならず今日では種種の骨折の結果種種の種類が出来たのである。

其外又牛馬犬羊杯を改良するのも全く前同様の仕方とやると多くの牛馬犬羊の中から素性の良好なる牝牡のみを交尾させて子を擧げさせ又其兄弟姉妹の中でも良好なるもののみを撰で交尾させて子を取ると云ふやうにして數年數十年數百年と同じ

仕方を繼續してゆくと後には殆ど別種の牛馬犬羊が出来るのである箇様などは古來今日に至る迄現にやつて居るとで決して珍らしくはない是れが即ち人為淘汰といふものである今日家畜と唱へて居る動物や野菜と唱へて居る植物の如きも決して初めから家畜野菜として特造されたものではない初めは唯野生の動物植物であつたのを全く人為淘汰なる人工で以て數百千年の間に家畜野菜としたのである米でも麥でも其他の穀物でも同様の仕方であつたのである造物主が目的的に箇様なものを人間に惠與してくれたのでは決してない全く人間自身が目的的に箇様なものになしたのである人間が全く因果法即ち自然法を利用したからそれが出来たのである。

但し種子や卵のよいもののみを撰んだり又は素性のよい牝牡のみを交尾させて其子を取ると云ふのみではまだ十分でない其上に尙培養や飼養に十分心を用ひぬければならぬのは勿論のことである種子や卵のよいものを撰んだり素性のよい牝牡を交尾させて其子を取るといふのは全く遺傳の良好なるものを撰ぶ譯で最も必要ではあるけれども尙其上に其物自己の應化といふとがそれに副ふて來ぬければならぬ即ち其物自己の生育上に利益なる手段を加へるとである培養や飼養が適當の術を得るのが即ち應化の良好なるものである此遺傳と應化との二つがよく揃てゆけば必ず十分な成功のあらはれるのは當然のとである。

余は先年農科大學の農藝化學の教師ケルネル氏(Kornel)がやつた稲の培養に就て實に感心したとがあるケルネル氏は同一種類の稲の良苗を同一の田地に部分けをして植付て而して其肥料を一部毎に變じた即ち第一部には十分最良の肥料を與へ第二部には第二等の肥料を與へ第三部には第三等の肥料を與へるといふ

やうに第四部第五部と段段に肥料を下等にして一番末部になる
稲には丸で肥料を與へなかつたのであるが其各部の生育の相違
といふものは著しいとである素人目にも實に驚く程であつた此
各部の稲の種子は皆一樣のもので決して良悪の相違はないので
あるのに全く培養の仕方の相違のみで生育上に大なる相違が出
來るのである、それであるから假令遺傳が何程よくとも應化の方
が共によくなければ決してよい物は出來ぬのである是れで遺傳
と應化と二つながら大切であると云ふとが能くわかるであらう
俗諺に瓜の蔓つたに茄子はならぬと云ひ又氏うぢより育そだちと云ふとがあ
るが一は遺傳の理を説き一は應化の理を説いたものである實に
能く盡して居ると思ふ若し其一を缺いたならば進化といふもの
は全くないのである。

右は人為淘汰といふものであるが自然淘汰は自然的に起る生
存競争の結果であるのに人為淘汰は人間が人為的に起させる競
争の結果であると云ふ違ひがある自然淘汰は全く自然的に因果
的に且つ無意識的に出來るのであるから其年數が長くなくては
効能が見えないけれども人為淘汰の方は人為的に目的的に且つ
意識的に出來るのであるから比較的短少年數の内に効能があら
はれるのであるけれども自然淘汰は古來數萬億年も費して出來
たのであるから遂に十分に種の變化までも遂げたモノネラやアミ
ーバの如き最下等のものから進化して吾吾人間さへも出來たの
である然るに人為淘汰の方は自然淘汰に比して比較にもならぬ
短少年數のとであるからまだ種の變化が十分出來たとは言へま
い尤も前述の鮒から錦魚が出來たり野獸から家畜が出來たり野
生植物から米麥野菜杯の出來たなどは大なる進化に相違ない尙
此後とても人為淘汰の効能が何程著しい歟もわからぬのである。

以上は自然淘汰の理をわかりやすくするために人為淘汰の
を述べて淘汰の理は自然も人為も全く同じとであるが其相違は
唯自然的無意識的と人為的意識的との別のみであるといふとを
示したのである然るに又箇様な非難説がないでもない「自然淘汰
の理を明瞭にするために人為淘汰の理を説くのは至極面白いや
うである人為淘汰は名稱こそ新しけれ古來人間が知らず識らず
やり來つたとに相違ないが併し人為淘汰と同じやうな作用が天
然にも必ず行はれて居るといふとは何の證據があつて言ふと乎
其證據は到底發見が出来ないではない乎古來誰一人として自然
淘汰の作用を目撃した者はあるまいして見れば唯蓋し人為淘汰
のやうなものでもあらう乎といふ臆測に過ぎないのである是れ
が非難説である固より誰一人として自然淘汰の作用を目撃した
者はないに相違ない。

が併し彼の自然界に於ける三大矛盾の道理から研究して見る
と其研究の結果がどうしても自然淘汰といふ作用になつて來ぬ
ければならぬのである其外には何と考ても考へやうがないので
あるして見ればどうしても左様に假定しておくより外に致し方
はない否其假定は必ず眞理に相違ないと信ずるのである箇様な
非難説が出るとは云ひながらそれは唯消極的に非難するばかり
で其非難に代はる所の一説を積極的に出す人は一人もないので
ある。

ダーキン氏が前世紀の五十九年に「種の起源」を始めて刊行して
から最早殆ど五十年になるけれども其後進化の手段に就ての一
大新發見といふものは一もないのである其他又進化其ものを十
分に是認せぬ人も随分あつた有名な學者の中にもあつたキユッ
ー氏 (Quvier) アガシッス氏 (Agassiz) と云ふやうな大學者は皆進化論

の敵であつたのであるが併し是等の人人は今皆故人となつたとて其後は大學者中に殆ど敵はないのであるのみならず生物學者中には勿論の他凡ての科學の有名なる學者に進化主義殊に自然淘汰説を信ずる人は益多くなつて來て反對論者といふ者は最早殆どないのである。

本講の終尾に於て一寸一言せぬければならぬとがあるがそれは外でもない地質學が大に進化學の正確なるを證明する味方となつたとであるダーキン氏より少しく年長の人でライエル氏(Lyell)といふ有名なる地質學者がある此人は近世地質學を一新した人で丁度生物學でダーキン氏の如き人であるが此大家の研究に依て第一紀に魚が始めて生じ第二紀に爬蟲類が始めて生じ第三紀に哺乳動物が始めて生じたのであると云ふとが確かにわかつて來たがそれは種種の地層から出る化石でわかつたのである

此事は一寸前にも述べておいたのであるが此地質學上の研究發見が非常に生物進化の理を證明する力となつたのである。

尙ここに一寸述べぬければならぬとがある以上述べた所は孤立して居る第一段階の有機體即ち單細胞的有機體と并に孤立して居る第二段階有機體即ち複細胞的有機體とに就て述べたのであれども又此複細胞的有機體を組成する分子となつて居る單細胞的有機體の相互間并に此單細胞的有機體が集合して出來て居る所の各部分の相互間にも矢張生存競争が起るのであるが此事に就てはルーキス氏(Roux)が研究して其著 *Der Kampf der Theile im Organismus* に委しく論じて居るのであるのみならず又第三段階有機體即ち複複細胞的有機體(蟻又は蜂の社會并に吾々の國家)の相互間にも固より生存競争があるのであるが是れは後に論ずるであらう。

第三講 人類界に於ける生存競争自然淘汰

第一章 吾吾人間と高等動物との懸隔

諸君！既に述べた通り吾吾人間は進化の頂點に迄達したもので既に萬物の靈長となつたのである其最遠祖は原始動物であつて又其最近祖は高等猿猴の類であつたに相違ない凡そ進化は粗生存需要の同一である生物の相互間に於て最も劇烈に起るものであると云ふとは既に述べた通りであるから吾吾人間が今日の人間となるに就ては吾吾と最高等猿猴の類との間に最も劇烈な競争があつて、そこで遂に吾吾の勝利となつたのに相違ないと思ふ。

最高等猿猴と吾吾人間との相違に就て少しく論じて見れば最高等猿猴といふのは所謂似人猿(Menschenaffen)で其中に四類がある

即ちオラング、キツボン、ゴリラ、シムパンセ(Orang, Gibbon, Gorilla und Schimpanse)であるが是等の最高等猿猴と極劣等の野蠻未開人種とを比較して見ると其心身に於て殆ど類似して居る點も少なくないが併し其間に優劣の懸隔は随分大きいと云ふとである、して見ると古代には今日の最高等猿猴と人間との中間に最高等猿猴よりは高くて人間よりは低い一種の猿猴があつて、それが人間との劇烈なる競争に負けて遂に斷滅して仕舞つたのではなからう乎といふ疑が起るのである今日の最高等猿猴と人間との中間にあつた一種の猿猴が若し斷滅して仕舞つたのであるならば今日の最高等猿猴と人間との間に大優劣のあるのは當然のとであると思はれる是れはヘツケル氏の考である。

ダーキン氏も箇様に言つて居る「近來未開人民が類に文明人民に接するやうになつて來たが、それがために未開人民が文明人民

との生存競争に打ち負けて漸次断滅するやうな傾向がある否既に断滅した人種も随分あるが将来は益々左様などになつて遂には劣等人民が全く断滅して高等人民のみが残るやうになる乎も知れぬ若しも左様になつたならば人間と最高等猿猴との懸隔が非常に大なることになるであらう云云尤なる推考のやうに思はれる。

ヘッケル氏が最下等の原始動物から人間に至る迄の進化の代数を二十五代と立てて論じて居ると云ふとは既に述べたが其第二十四代に當る似猿人 (Affemensch) 即ち言語なき原人 (Sprachlose Urnensch) と稱するものは現にあるものでもなく又未だ其化石を發見したと云ふのでもなく全くヘッケル氏の想像に出たものに外ならぬのであるが併しヘッケル氏の言ふ所に據れば今日の最高等猿猴と吾吾人間との中間にどうしても箇様な一種のものがあつたに相違ないとせぬければならぬ理由は言語の比較研究

即ち言語の比較解剖 (Vergleichende Anatomie der Sprache) が確かに證明する而して此似猿人なる一種のものは吾吾真人 (Echte Menschen) の如く既に直立歩行も出来るやうになつて手足の分業も十分であるのみならず心性も大に發達して居たけれども唯吾吾真人に及ばぬ所は未だ綴音言語即ち眞言語 (Gegliederte oder echte Sprache) といふものがなく他の高等動物同様に纔に音響語、符徴語若くは接觸語 (Lautsprache, Zeichensprache oder Tastsprache) のみがあつたといふ點である云云 (其著 *Natürliche Schöpfungsgeschichte* 第七一六頁第七三三頁)。

此ヘッケル氏の論説の當否は余輩には到底分らぬとなれども併し右ダーキン氏の説を参考して見れば或は其様な中間のものがあつたの歟とも思はれるのであるが先づそれはそれとしてここに吾吾人間の發達に就て一寸述べて見たいと思ふとがある是れもヘッケル氏の説であるが「吾吾人間の發達進化といふものは

二種の最重最大なる生理的作用(Physiologische Funktionen)に依るのである即ち直立歩行と綴音言語との出来るやうになつたとである而して此二種の生理的作用の生ずると共に又二種の形體的變化(Morphologische Umbildungen)が生じた二種の形體的變化とは即ち手足の區分と喉頭の區分(Differenzierung der beiden Gliedmassen und des Kehlkopfs)とである而して此器官と此器官の作用とが進歩發達したために更に腦の區分(Differenzierung des Gehirns)と心神作用の發展とを促すとなつて爾來益進化の度を早めたのである云云(同書第七三二頁)して見れば右の生理的作用と形體的變化とは實に今日の吾吾人間が存在する所以の起因である若しも此二種の進歩がなかつたならば今日の吾吾は到底存在するものでない此二種の進歩といふものは實に驚くべき結果を生じたのである。

吾吾人間は右様に進化したものであるが、そこで生存競争の對

手の最も重なるものは必ず似猿人若くは似人猿に相違なかつたであらうけれども併し吾吾が人間に迄進化する以前のみならず尙今日に於ても最も手強い對手といふものは猛獸であるが開化人民は今日大抵是れも征服したり剿滅して殆ど其害毒を免れるやうになつたから先づ心配はない然るに今日に於て最も恐るべき競争對手と云ふのは却て目にも見えぬ程の小生物である、それは何乎と云へば所謂黴菌(Bakterien)である此小生物の害毒たるや實に恐るべきものである決して猛獸の害毒と同一視すべきものでないけれども是れは近年自然科學の進歩に依て始めてわかつたのであつて、それまでは少しも知らないから何とも心配はなかつたのであるが今日わかつた上は是れほど恐るべき競争對手は殆どなからうと思ふ今日猛獸の害毒を免れたやうに此恐るべき小生物の害毒を避けるとは殆ど難い今日以後の自然科學の進歩